



神々

(下)

アラン

高村昌憲訳



### 第三部 ジュピター

#### 第一章 暖炉

オデュッセイアはカリュプソの浜辺で故郷のイタクの島にある彼の家の屋根から上がる煙のことを考えて、死んで仕舞いたいと思います。家とは神聖な場所です。この言葉は最良と最悪を同時に意味していることに注意して下さい。幸福とは鎮められた恐怖であるからです。従って平和には、両面のある壁のように二つの側面があります。家の外観は、雨や風に立ち向かう敵としての形をとっています。しかし家の内側は、人間の貝殻のようなものであり、人間の鑄型です。空虚な場所以上に、多くを表すものは何ともありません。それは彫像の始まりです。これらの存在と不在の中央では、火が王です。火は暖め直して明るく照らします。火を保持する術は動物たちには決して無く、多くの道具、多くの手、多くの慎重さに依存しています。燃える石炭の中にあらゆる種類の物語が見えるディケンズのあの娘のことは、誰もが知っています。更にもっと精緻に、プルーストなら動物のように動く火の音を、ドア越しに聞きます。この火という建物は、絶えず崩れています。力強さと変容にとっては最良のイメージです。カントは、一哲学者のこの疑問を古い問題として引用しています。「煙の重さはどの位であろうか」。他の人々は突然に消える火花について瞑想しました。又、他の人々は灰についてです。炎の熱については誰もが瞑想しますが、その熱は生きる肉体の熱と同じであることは極めて明白です。暖炉はこれらの隠喩的な思考の中心です。そして全ての影は人間に還元させますし、全てのものが懐かしく大切です。ここにはもう一つの詩が貯蔵されていて、外部の自然がひっくり返って逆になったイメージのようなものです。犬や猫たちもここでは祈る以外に存在していません。人間は動物たちの神です。かくして昼は、神のような夜に自分の姿を映して見ます。それ故に、クリスマスは思想の復活祭です。しかしながら父、母、牛、驢馬によって崇拜される子供の神は、更にもう一つ別の段階の誕生を意味しています。

精神は未だ火の中で見失っていますし、影の中でも見失っています。でも闘技者は最良の場所におります。その様なものは、彼の神のような権利です。老人たちは既に、影となって暖炉の両脇に姿を消しているかのように、最早眠っている英知でしかありません。この様にして夢想へのドアは作られ、如何なる建築上の独創もありません。彫像たちはそこに輪をなして、辛うじて壁から抜け出しています。そして、この秩序の内省の中で、様々な力の交換や組み立てが行われます。「あなたは私の父を見る。父は柱に凭れているが、暖炉のある私の母の処へ先ず走りなさい」とナウシカア(1)は言います。しかしながら、この取り成しの力は、都会の平和を前提にしています。農民の暖炉にある数々の影は、もっと締め付けられています。そこでの労働は、もっと身近で切迫しています。そこでは又、長い経験がより一層価値あるものになります。私たちのより一層古い思想、最も自然な思想は、息子から父への対話でしかありません。そして、泉や耕作や境界が問題になると、老人は言います、「わしのおやじが言ったことを思い出すよ」。追悼は単なる信仰心だけのものではない、と私は言いたいのです。死者たちは、彼らだけが知っていることを証言しに来るのです。人が死んだ時は、最早その人が言ったことの思い出しかありま

せん。人々は、その人の声をもう一度聞きたいのです。全ての精神力と最も強烈な注意力が、この呼び起こすことに応用されます。優しい愛情なら、もっと弱いものでも満足するでしょう。かくして最も優れた人々も、唯優れているだけでは最も輝かしい不死が保証されません。そうなのです。寧ろ、彼らは行動能力があつて最良の名声を残した人々です。シーザーが姿を見せます。

私たちはシーザーに又、再会することでしょう。信仰心とは先ず子として親に対するものでしたし、言葉遣いがそのことを思い起こさせてくれます。又、田園の生活においては、多くのことを知るためには長く生活すれば十分であるからです。そして大地の労働は、即興が昔からの証言よりも評価されないようになります。というのも、成功するには長い歳月が必要であるからです。それ故に家族にあつても、最も年上の者がその精神によって王になります。死んでも相談されます。いや、もっと適切に言うなら、生存しないことでもっと良く相談されます。何故なら選択することになるからです。人は強く勇敢で慎重な死者に相談するのであつて、決して最期の時期に経験したような頼りなく戯言を言う者ではないのです。まして死んでも相談するのは、死よりも悪いことではありません。これらの心象は愛情には悪いのみならず、最も急を要する生者の思想は、死者の死を消して仕舞うのも更に自然です。そしてこの最初の信仰心は、常に幾つもの用心に溢れていました。そこから火葬台や墓石が生まれます。又、そこから死者たちが十分埋葬されずに醜い姿の儘に、無用であり有害でさえあるものとして、無用であつても恨みを言いに戻つて来る極めて一般的な信仰が生まれます。その結果、いずれにせよ十分に力のある一種の慰め、つまり亡霊の姿が生まれますが、何しろそれらの亡霊には相談することが出来ませんし、愛することも出来ないのです。それ故に、不死のものたちは永遠に若く、もっと正確に言うなら、彼らは力強く、信仰そのものによって美しいのです。しかし、農民の芸術は木の根を彫ったり、粘土で何かの小像を捏ねて創り上げることに制限されています。でも、暖炉の周りにあるこれらの作品は、遠方の顔や何時も若々しい思想を呼び起こすには十分なのです。諺は多分、言葉の彫像のようなものであり、韻律や押韻によって記憶の中で確保されます。これらの形で祖先は生きていました。そして、それがアイネイアス(2)のように、面貌も無く、恐らく名前も無い沢山の祖先たちを自分と共に持つて行くことも又信仰でした。というのも、尊敬すべき死者たちが沢山いることや、忘れられる慎ましい数々の美德の価値を、経験によって十分に知ることも人は良く感じているからです。その様な者たちがそれ故に、如何なる時代でも如何なる国でも、ラレスやペナテスという守護神になったのです。これらのささやかな神々は、少なくとも自然ではありません。寧ろそれらの神々は、自然が育む時に殺し、全てを忘却し、それらの繰り返しによって自分自身を忘却する自然と闘つて勝ち取つたものです。お分かりのように、常に些か狂気じみでいて、屢々意地悪い屋外や日中の神から、唯々賢明で親切でしかない屋内や夜間の神まで、ここには幾つもの段階に印を付けることが重要です。しかしながら、前者の神からは別れなくてはなりません。というのも、息子が父親の栄光の中で生き返るまでには時間がかかるからです。暖炉は一つだけではありません。都市ではそれを取り巻いています。寺院ではそれを見下ろしています。そして平凡な力を持つこれらの神々も、屢々具合の良い時を持つことはありません。〈さらばシーザーよ、今や死なんとする者たちが...〉。(完)

(1) ナウシカアは、ギリシア神話で、『オデュッセイア』に登場する乙女で、スケリアの島に漂着したオデュ

ツセイアをもてなす。

(2) イネイアスは、ギリシア神話で、古代トロイアの英雄。

## 第二章 英雄

野生の英雄というものは恐らく決しておりません。ヘラクレスも結局は農民です。彼は危険な動物を打ち破り、そして羊の群の盗人であっても機会があれば退治します。しかし又、すっかり神になるまでには至りませんでした。そして海の冒険者たちも同様に、完全な英雄ではありません。英雄が腹部であることは殆どありません。英雄は略奪することを望みませんし、主として守ってやろうと望みもしません。恐らく、立法者でもありませんし、王でもありません。というのも、これらの職能には慎重さと吝嗇の傾向が生まれますが、それらは英雄には余りに縁遠いものです。英雄は高潔であり、その怒りは純粹です。そこから私は、英雄には精神も欲望と同じように少ししか持っていないと理解します。そう言っても私は言い過ぎで、伝説を生むような言い方です。何故なら恐らく、英雄たちは瞬間瞬間にしかないからです。だがその上更に、人間のこの瞬間は屢々間違っ理解されます。人間の構造として胸部を忘れることで、そして詩人が言うようなことですが性急な激しい心臓が自らの鼓動で目覚めるのを忘れることで、正しく理解するのに失敗するのです。殆ど何時も人は欲望によって、そして慎重さによって人間を描写します。それは腹部や頭部でしかありません。消費する部分を忘れています。それは心臓であり、筋肉の王であり、筋肉組織の象徴であり、爆発そのものです。一つの筋肉は馬のように引っ張ります。抵抗には興奮し、障害には苛立ちます。懸命に勝とうとします。この活動には少しも理性がありません。彼自身のためが彼の理由です。その筋肉は抵抗しないものを許しますが、抵抗するものには残酷です。自己への一種の残酷さによって残酷なのです。自己の力による乱暴です。ご存知のように蛙の筋肉は切り離されても、ほんの少し刺激を与えると筋に沿って再び最期まで緊張し続けます。実行に努める部分から出発する時に、英雄が再び生まれるのです。全体が人間です。つまり自ら感じたり思考したりする存在であり、更に臆病な腹部でもありますが、過剰なエネルギーと迅速な激怒を示す組織によって従属させられてもいます。誇りとはその様に構成された存在の中の主要な情熱です。しかしながら一種の吝嗇とか怒りに対する慎重さを屢々保持する名誉への用心に従って、私たちが誇りを判断する必要は決してありません。真の誇りには、自らの力で車を繋ぎ、自らの首輪に力を加える馬のように、迅速で全く動物的な出発があります。幾つかの筋肉の連結が自分自身を感じ、予見し、認識し、判断する時、その様な出発は死か勝利の合図になります。これは決して試みるのではなく、全てを投げ出すことです。拳骨での一撃、斧での一振り、櫂での一掻きには英雄的行為の一瞬があります。しかしながら節度を持つことです。何故なら無感覚な障害が、努力を仕事に変えるからです。

英雄に役立ち、英雄を形づくる障害とは、敵のことです。つまり同類のことであり、同類に大変高く評価されたものであり、一言で言うなら結局はライバルです。ライバルとは、自分自身に相応しいと判断する人物です。それ故に莊嚴な戦いが無く、挑戦も無く、有名で語り草になっているもう一人の英雄が長く待ち受けることが無ければ、英雄として完全ではありません。人間は救助活動や狩猟やあらゆる種類の危険を愛しますが、それは完全には決して眠らない英雄的な部分によるものであるからです。しかし英雄の全てを爆発させるためには、狩りの中で最も危険な人間を狩るのでなければなりません。都市とか集会につきものの一種の興奮がなければなりません。

んが、それは弱者たちの恐怖と希望、侮辱的な脅迫、定められた期限と場所、運用される大義名分、儀式、公開制、恐怖と勇気の間での予行演習のようなものと同じ準備であり、結局のところ『エルサレム』(1)やその他の英雄物語に読まれるものです。そして、それらの激烈な物語を注意深く見詰める者は、そこに現代の私たちの戦争、取分けそれらの戦争の始まりを認めることでしょう。その瞬間は人間的であり、常にそうであるでしょう。

アキレスとその馬との類似も考えてみるべきかもしれませんが、英雄とくたくたになるまで乗り続ける馬との違いに、人は恐らく何か気付きます。というのも、意志を人間構造や障害からも切り離すと、人は人間の全てを失います。詩人さえも失われます。才能の全ては大地や血から生まれます。言葉遣いは同一の言葉であっても、眼に見えない森の神々を意味しているのを理解させてくれるよう、そして最早そこで思考しなくなるまで神々を軽蔑する人間は、自分自身に足るを知り、破壊するためにしろ創造するためにしろ、オリンポスの神々と張り合っているのです。それ故に人間の障害をじっくり考えなければいけませんし、その中で最も高次のイメージを注意深く見守ることで。そして、人間の障害には次の様な特性があります。それには誇りの強さがあり、先ずは脅されることでより一層力強くなり、同類と見做されたものに投げる力の幾つもの徴によっても、より一層力強くなります。要するに、自分自身の恐怖を制御して、自分自身によって常に脅されている驚異的な均衡によってしか保持しないからです。というのも怒りによる戦慄は、一種の前兆であるからです。そこから齎されるのは、馬の狂った決断です。それはくたくたになって山を駆け抜け、恐怖の最初の動揺によって人間の裡にも又より一層狂おしい方へ逸らせますが、人間はそれを自らの裡に感じ、相手の中からも見抜きます。又、それは先ず感動するためには第一に全てに迷います。そして確信によってその衝撃を倍加することを人間に助言します。出発前のこの集中と自省は、困難だらけの行動において大変に注目すべきものですが、しかしながら英雄において、そして公然としていて良く知られた決然たる人間の障害を前にした時程、決してその発条を強く引っ張って緊張させることが出来るようにはなりません。死そのものが目的とされるようになることはありません。死は決して目的ではありません。死の思考は、まさに敗北の思考と同じように排除されます。何故なら、その思考が既に敗北であり、死であるからです。しかし、跳躍しようとする感情には、もしも人が少なくとも全力で戦いたいと思うなら、全てを与えなければならず、如何なる期待もせず予め経験します。自らの意志に反しているかの如く、全く素朴に正義の士であるサン＝シモン(2)は、かの有名な伯爵を指示するために遠回しに言う迂説法を飽きることなく何時も使用します。彼は伯爵を呼ぶのに「英雄大公殿」と言っています。この様な人間の日常は、彼にとっても何も楽しくないのは確かです。私は同じ言葉の繰り返しによって、益々良く感じます。ひらめく決断力、迅速な出発、自己の前に投げ出された恐怖、勝利については決して何も疑うことのない絶対的な誇り、これらの政治的時代において大した結果があった訳ではなかったのですが、栄光が無かった訳でもなく、全てのもものが集められているのを良く感じます。そして、殆ど全てに腹黒い性格であるこの実例は、優しくもなく又善良でもないアキレスの性格よりも、更に一層良く私に教えてくれるものです。それは都市の神が先ずもって愛想の良いものでなく、人は恐れることなくそれを賛美しないことを覚えるのは重要です。又、それは単に恐れているから賛美するばかりではありません。民衆はもっと鋭く、そしていい加減な気分のようなものに期待しますが、それは如何なる理由も無く大地を揺らす

ものです。巨人族の征服者であるホメロスのジュピターは、考えること無くスプーンを手に持ち、或る樽から善を取り出し、他の樽からは悪を取り出して、これらを混ぜ合わせて一人ひとりの運命を創ります。詩人はここで軽蔑よりも遙か下方にある一種の軽蔑に触れました。些細な美德でも決して持たないのを英雄には許されていると人が言う時、それでは未だ十分な言い方になってはおりません。ところで以上が人間の火であり、もう一つの本物の火と同じように非人間的であり、そして幾多の暖炉の中の一つの暖炉で燃えているのです。（完）

（１）『エルサレム』は、イタリアの詩人タッソー（一五四四～一五九五）が書いた叙事詩『エルサレムの解放』（一五八〇）のことで、十字軍を歌ったものである。

（２）サン＝シモン（一六七五～一七五五）は、作家・政治家であり、ルイ十四世下で宮廷生活を書いた『回想録』がある。

### 第三章 伝説

夜の集いは、ここではゆったりとしていて大っぴらです。人々は大声で英雄を讃えます。定められた日に、綺麗になった彫像の前で讃えます。建築家や詩人や朗唱者の自らの才能と自らの不滅さえも因となっているその記念祭は、美しくする敬虔な仕事を、子としての敬虔さを極めて自然に更にもっと遠くへ運んでいます。そして聴衆たちは全てが伝説の擁護者ですし、それは伝説という言葉そのものが表しています。というのも、伝説とは人が言うべきものであるからです(1)。自然である全てへの軽侮や、過度を超えた過度によって、英雄には超自然的なものがありますが、それは少なくとも意志による法則です。生き残ったこの精神は、自分自身で飛翔して誰もついて行くことが出来ません。大空には神々がおります。何故なら、重力は私たちの最も身近な敵であるからで、決して譲りません。しかしこの場所には、他にも特権があります。私たちが思い出を探すのは多分、何時もそこです。というのも思い出は第一に身近の対象から生まれ、そして知覚がそれらの対象を常に養うからです。しかし養うと同時に、知覚はそれらの対象を消します。そこから対象を追跡する注意力は、自然と雲や純粋な光の方へ赴きます。両眼を上げた後の夢想のこの短い瞬間は、名状し難いものです。何故なら人が何時も把握しようとしたものは、何時も霧とか太陽の中に溶けて仕舞うからです。孤独の人々が住み着くためには、話をする事しか残されていません。その様なものが自然な崇拜です。又、犠牲の炎と煙も、私たちの視線を導くことを言わなければなりません。自由な熱と生きた体の熱との類似は又、生命が薪の山の煙と共に飛翔するのを想像するように導きます。これらの符合した隠喩は、私たちがより一層美しく最も愛される最良のものを探し出すために現在の対象を拒否するや否や、私たちの思想の動きを常に支配します。しかし本当のところは、眼に見えない神秘の中に確実性があり、それが私たちの思想の実際の神秘であり、あらゆる宗教の最後の対象です。というのも、私たちの感覚にとって欠けているものは、私たちがそのことを思考する時、何らかの方法で既に存在するのは本当であるからです。恐怖における非常に敏感な想像力のこの結果は、文字通りに私たちの肉体を捉えて侵入して来る、如何なる情動であっても切り離せないものです。あの激しい隠喩的表現のように、私たちは触れられ、把握されます。私たちは対象を求めます。しかし見出しません。この空虚の中に私たちは幾つもの言葉を投げます。幾つもの言葉です。というのも動作は、見る以上に感じられるものであるからですが、言葉は対象の如く私たちの耳に戻って来る特権を持っているからです。それ故に呪文は、精神を極めて頻繁に呼び起こすのを蘇らせるための永遠の方法です。私は、精神が内部と同じように外部にも正当に自らを知ろうと努めることを、予め知って置いて欲しいのです。しかしながら、この観念の中の観念の正確な批判は、ここでは未だその場所には無いようです。

今のところ重要なのは思い出することであり、語ったり聞いたりすることの幸福です。原始人たちは、黄金時代と同じように虚構です。集会が思い出の場所であるのは本当ですし、これからも常に本当です。というのも対象が欠けるや否や、夢を支えることが出来る証言とか同意のようなものがなければならないからです。伝記や年表というものは証人と、証人の証人との対話を前提にしています。又、お分かりのことですが、もしも集会の人数が多ければ、一つの秩序が出



来上がり、それが年代に優先します。というのも、年代とは過去の証人であり、結局のところ朗誦者であり朗読者であるからです。全ての雄弁は、主として聴覚上の諸規則を前提として、それが目的と見做されていて、単に混同や曖昧を避けるのではなくて、予め言おうとすることの場所を準備し、殆ど計算済みですることでもあります。詩とは、全ての人々が許して認めていることしか表してはならない、この雄弁の自然な形式です。詩篇は単に栄光に仕えるのではなく、栄光そのものです。

今は、伝説において常に行われている、特に重要なものと殆ど重要でないものとの、あの選択を説明しなければなりません。私は既に指摘しましたが、子供のお伽話において、事物に対する労働は単純化されて殆ど無視されるだけですが、それは全ての有効な労働は子供には無く、子供の見方の外で行われるという理由によります。この時の旅は些細なもので、幾つかの言葉だけで言えば足りります。というのも子供は運ばれて眠っているからです。伝説というもの、そして歴史というものにおいてさえも、人はこれらを要約したものに出会います。幼年時代の動きはそこにあります。しかし、もしもそれが最良で全く成年の思想で確認されなければ、幼年時代を生き延びないでしょう。事実、歩き、運び、掘り、突き刺し、航海し、修理し、テントを組み立て撤収するという労働が、子供たちにとっては単調であり容易です。これらの行動が行われると、人は最早そのことを考えません。これらの長い時間をかけた準備期間は、物語の中では簡略化されて仕舞います。ある部隊は徒歩でポン・テュクサンからアルモリカ(2)まで行きましたが、それは私たちには自然に見えます。今日でもなお、戦争の動きは殆どゆっくりしていますが、物語になると電撃的になります。でも、人の記憶に残るようなドラマは、ゆっくりとして重々しい事態が配置されて、更に移行させるのを考えるのは誰でしょうか。ボナパルトやハンニバル(3)は、アルプスを越えましたし、敵に襲いかかります。関心事には距離を置いているのですが、まるで企図があったのも同じです。オランダ(4)は飛翔する馬上に乗ります。それが意味するところは、戦闘に赴く旅には関心が無いということです。どのみち旅に出るのですが、最早人はそのことを考えません。子供のお伽話は、この点では私たちよりも正直です。私たちの歴史家たちも、何時も人間たちの苦勞を忘れず。この種の忘恩の本当の理由は、いずれの場合においても同じものです。物を運んだり自ら赴くことは、道路を舗装するのと同様に、実際には困難ではないのです。勇気ある試練が重要なのです。そこまで物語は駆け抜けます。そして物質的手段は何時も貶されます。敢えて行おう力が無ければ準備は決して十分でないですから、これは当然なことです。何に対して敢えて行おうのでしょうか。恐怖そのものに対してです。全ての戦闘は私たちの思想の中にあります。全ての伝説も、雲にある不安の中にあります。(完)

(1) 伝説 (légende) とは、ラテン語で個々の物語 (legenda) をいう。

(2) ポン・テュクサンは、古代の旧名で黒海のこと。アルモリカは、七世紀以前の旧名で大西洋を望むブルターニュ地方のこと。

(3) ハンニバル (前二四七～前一八三) は、カルタゴの将軍で、ローマ軍に大勝するが、ザマの戦いに敗れ、亡命を重ねて自殺する。

(4) オランダは、イタリア詩人アリオスト (一四四四～一五三三) 作の長編武勲詩『オルランド・フリオーゾ』の主人公。



## 第四章 都市

墓場は幾つもの石の塊で驚嘆させられます。大変自然に置かれたこれらの石は、神に捧げられた人間たちの種族を生みます。長い間の思い出があり、長い間の忘却があります。ジュピターは父であり王です。それらの顔立ちは余りに明瞭です。しかし、死や神格化されたものでさえも、忘れられたものでなければなりません。ジュピターは何時も天に君臨していました。そのことは、人間の力は何時も崇められ、何時も超人的であったことを意味します。しかしそれには、石の堆積と人間の集団がなければなりません。そうでないと、雷や雲や嵐に人間を従わせる考えを人は決して持たなかったことでしょう。自然は都市の壁を破りに来ます。都市の内部では殆ど自然は忘れられています。追悼記念は石を積み重ねますし、祝賀を踏みつけます。ジュリアス・シーザーの時代や、余りに一年が短い高利貸しの時代には最早、復活祭は春にありませんでした。あったのは人間の復活祭でした。事態を改革するには、数々の大河を渡らなければなりませんでした。

如何にして都市は、寺院の周りや裁判所の周りや市場の周りに寄り集まっているのか、あるいは如何にして数珠や首飾りを売る者たちや言葉巧みに売る者たちは、取引や訴訟や儀式を行う大きな門前の直ぐ近くで屋台店が開かれているのか、そのことが理解されます。しかしその結果には驚かされます。これらの石の群の中で注意すべきことは何でしょうか。外部の自然は、そこでは庭の中に来て死ぬということです。そこでは殆ど嵐も聞こえません。牧神もニンフも最早飾りでしかなく、泉も鉛の管から吹き出しています。至る所が人間の鎚です。救うのは人間たちのものであり、危険も人間たちのものであり、嵐も人間たちのものです。そして影が隠すことが出来るものを、人は余りに良く知っています。二つの行列があります。一つは貧しい人々のものであり、もう一つは正午に交替する王の衛兵です。決して季節の無い秩序です。季節全体の中で脅す混乱です。武装した英知であり、決して議論せず、そして人々も決して議論しません。一日一日を救うのは、一つの国家理由です。瞬時にして完璧な仕事であり、その存在そのものだけで完成されます。垂直の思考です。何が禁止されて、何が許されているのかを知っていることは、子供たちがそうである如く、人は大変に幸せなのです。しかし何故かを、壁は決して語らないことです。従うべき道に関しては、少しも疑うものはありません。人間は水のように運河に従って行きます。かくの如くして盲信は確信に変わります。或る人は法と言ひ、他の人は道と言ひ、又或る人は神と言ひます。新しい計画は、田園では向こう見ずで大胆です。そんなことは都市では不可能です。街には乱暴な小道があります。家や境界を尊重するかどうか、人は決して自問しません。曲がらなければならない所で人は曲がります。しかしこの角の力は、計画にはお構いなしですが、私たちが至る所で見るとな都市の神を明らかにしています。この緩慢な英雄の変装やこの石の服は、台座の上に彫像を固定しますが、その台座も彫像と同じ位に雄弁です。そして都市の〈言葉〉の特性は、それを越えてならないというのではないのですが、人はそれを越えることが出来ないのです。

以上のことから、都市の思想がそれ自身で確定されたものであり、角のものであり、自らに委ねられた街の空間においては取るに足りませんが緻密であり、又その境界の長さには真剣で忙し

そうであることに注意するのは良いことです。田園の思想は牛が通る小道のように、全てが少しは禁じられ、全てが少しは許されています。都市では思想において全てが許されていますが、理性を必要としない耐え難いことが起きます。「中国の壁だ」(1)と極めて軽率な論客にパンルヴェ(2)は言いました。ぼんやりした人に言うのと同じ口調です。「あなたは轢かれて仕舞いますよ」。脅しと同じではありません。街路が袋小路に見えている時、それを知っている方が良いのです。だが結局のところ、人はそれを知ることになるでしょう。思考するためのこれらの諸規則は、都市的であるスコラ学の些末主義を説明します。しかし、公証人や裁判官が既に田園を支配しているように、舗石とか歩道からなる神学も同じように田園の宗教を絶えず文明化してしています。かくして英雄は大きな雲の上を走るのを止めます。全ては宮殿のイマージュに固定します。不死のものが、衛兵たちや門番たちや大臣たちや酌をする人たちを持ちます。これらの者たちは、町の全ての人々が知っているように、兄弟たちであり従兄弟たちです。英雄は統治します。でも、統治する方法は一つしかありません。神々は飛躍するのを終わっていませんでした。勿論、神々も又存在しています。『イリアス』の中で見出すのは、命令と狂ったような企ての、これらの混合です。これらの中に戦士は興奮させられ、巻き込まれ、止まっています。神々の死は、運命によって準備されます。運命とは壁のようなものです。人は壁にぶつかるのが少しも好きではありません。かくして人は壁に従います。

人は都市の名だけによって、如何なる種類の神々も理解しません。というのも石はそれで十分に事足りているからです。都会人たちはしっかりしていて、疑い深い人たちです。彼らの空想には動きが殆どありません。しかし農民たちは、果物籠と同時に狂った神々を毎日持って来ます。眼に見えないパンの神の何かが色々な姿をして、政治的なオリンポスに何時も戻って来ます。それと同時に、都市の建築家は逆に、三角形の笛を吹いている石で出来た成年男子の精霊サチュロス像を庭の奥に立てます。この混淆は全てが宗教のものです。何故なら、それは人間のものであるからです。そこに人は何時も子供らしい恐怖と希望を見出すでしょう。それと田舎の恐怖ですが、安心するのが少しも容易でなく、そして次にもう一つの恐怖ともう一つの安全の娘である都会の規則を見出すでしょう。保護が無いなら、子供は決して子供としていないでしょう。農民も又、保護が無ければ、農民としていないでしょう。全く純粋な都会人とは不可能ですし、そのことが意味しているのはその日の朝の二輪馬車や、数々の籠や、ミルクの壺や、市場のことです。田舎は食料のように都市に達します。しかしその反対に、純粋な農民は何時も欺くことになるであろう一つの虚構です。というのも田舎の人間も、パンや葡萄酒や乳製品で、平和に生活しているように見えるからです。でも、事実は大都市がなければ、直ぐに荒らされて仕舞うでしょう。もっと適切に言うなら、情熱が農場や村に火を付けるでしょう。というのも人間は至る所で疑い深く、陰鬱な思索家であるからです。それも精神という数々の果物です。田舎の平和を楽しみ、それを信じるのは都会人に相応しいことです。実際には牛たちが道を空けてくれるのです。しかし牛の角での一撃を想像し、恐れを抱くのは難しくありません。それ故に人が又、確立されている秩序を愛する術を知らなければ、大変に穏やかな夕べの大自然を愛するのは正しくないのです。その上、もしも人が最高神を頼らなかつたなら、大自然を愛する術も知らないでしょう。人は牛の角より悪いものを恐れるでしょう。つまり動物の精神を恐れるでしょう。それ故に田園の神々は、装飾の水準に抑えられなければなりません。牧神は笑わせます。でも、ジュピターが



笑わせたなら、牧神は決して笑わせないでしょう。この様にして司祭の術策は、何時も勝っています。（完）

（1）万里の長城のことと思われる。

（2）パウルヴェ（一八六三～一九三三）は、数学者・政治家。

## 第五章 競技者

オリンポスの宗教は、所謂オリンピックと良く言われることもあり得るでしょう。神とは、完全な人間ということです。その価値は、人間の中に全てがあるのです。そして、火山や大蛇や狼を羨むものは何も無かったということが、主要な観念であり、根本的観念でさえあります。従って、それは人間の姿をした神々を拒絶したり、信じて前進しながらも全ての力や生の儘の自然を崇拜することに戻るのは、一瞬の見方です。そして人間が、人間の生の儘の部分に特に好んで崇拜する時、人間は既に道に迷っていると言うよりも、道に止まっているのです。というのも、この部分は何時も盲目の自然であり、私たちよりももっと強い自然でしかないからです。私たちが自分自身で勝者になることが出来て自分自身に勝つことが出来るこの点に、ソクラテスは大きな注意力を向けていました。それは何を意味するのでしょうか。その様なものは、ソクラテスからソクラテスへ出した問題でした。しかしながらこれは哲学でしたし、常に質問でしかなかったのです。この質問好きな人は、私たちの裡にもいますし、又その瞬間も持つことになるでしょう。答えも質問も無く、認識することも無く、競技者はオリンピアの地でもって答えていました。彫刻家も答えていました。詩人も、不死の競技者たちである神々を走らせながら答えていました。この最初の記念すべき人間の浄化は、人が言わなくても意味があります。これは蛇信仰、酒神バッカスの狂気、純然たる円盤投擲者を偶像崇拜としては制限することは、聖人たちの自然な働きでした。聴罪司祭の巧妙さは、これらの信仰の最後のものから最初までの隠された道を再び見出します。人間は王でした。これは偉大な一歩でした。しかし、統治することも些細な出来事ではありません。いずれにせよ競技者や彫刻家が消せない文字で書いたのであり、先ずは自己を統治しなければなりません。

これは人間としての規範である、競技者の美を表すことです。そして、極めて適切に讃えられたギリシア人たちの哲学は、強健な人間における例の四つの徳を読み取ることしか行いませんでした。自己に打ち勝つことや自己を上手に管理することは、統制と勇気と英知の秘密であり、正義の秘密でもあります。しかし人が望んでいることを行うのは、もしも先ず自分の手を管理する術を知らなかったなら、空しい計画です。リュートの演奏者は、行おうとすることを良く知っていますが、何故行うのかを知りません。そして経験が教えてくれることは、指に圧力を加えて結び付けたり、放したりするのは、何時も全ての肉体であるということです。緊張してぴんと張った状態は、私たちの裡で私たち自身の恐怖を鎮めないでいることです。そして少なくとも人間としての全力を自己に向けない時に、馬の力を羨むのは狂気の沙汰です。人間に固有の存在や力を発見することによって、樹木の節や動物の口の皺に、驚く程非常に良く似ている意地悪な人間の渋顔は、少なくとも典型としての歴史から消されているのが分かります。恐怖を抱かせるまでになる卑劣な人間は、仮面や兜に痕跡を残している戦争のための策略があります。動物の姿をした怪物がミケランジェロの「考える人」の頭部を覆っていますが、これは最早装飾でしかありません。怪物は失墜しました。最早、怪物を通して思考することは問題になりません。数々の価値の順序において、競技者の面貌が過度な仮面に勝っているのを私は求めます。但し、人間の問題は何時も同じものであるから、もし言えるとするなら、思考するために自らに恐怖を抱かせたり

、話す代わりに喚いたりするのも、既に一つの方法になっています。百もの頭を持った動物から自ら純粹でありたいと願う精神へ、注意することも無く赴く人々への警告が、その時は一つの邪魔な段階を越えています。この秩序はヘーゲルが教えるような真の弁証法です。というのも鉱物的自然も、植物的自然も、人間的自然も、腹部も胸部も頭部も、結局は精神も全てがあるべき処にあるからです。いずれにしても諸宗教の系列は、哲学者たちの試論よりもこの点に関しては、より良く教えてくれます。しかしながら、このこと自体は哲学の一つの成果であり、宗教の成果ではないのです。

私たちが今もいる宗教の段階は、全てが不動で、謎のようなこの面貌の中にあります。その様なものが神々です。そしてこの面貌の秘密は、全てを肉体の均衡に持って行き、注意がそれに沿って流れて安堵するものです。もしも人が最良のものに出来ないなら、それは果敢さの補助者である帯によるのです。だが、既に恐怖に対しての甲冑である筋肉による帯によって完全になるのです。そして足による偉大な動きは、殆ど腕まで遡ります。その様にして自己の自由と現実の思想は連結し、下位の額から出て来て、細い流れのようになって筋肉の最小の筋まで運ばれて行きます。その面貌は、綺麗に一掃されて、姿を現すことも模倣することはありません。兵士が、自説に支配された怪物めいた絵画をそこから一掃したように、それと同様に兵士は行動が無くても表現している皺を消しています。そして、それらの皺は私たちの過度な運動をする体操教師たちにおいてさえも、常に存在する術を知ることに反して行動する一つの知識の表徴であるのです。この人間像が極めて超人的だろうと、それを描き出したものは人間に非常に近く、人間と非常に良く似ていて、極めて地上的な幸福であったとしても、些細なものではないのです。従ってその人間は、彼の限界の中に一度は、幸福と自己による力強さを見出します。それを欠くものを彼は拒み、決別させます。彼は樹木や急流や火との共謀を拒む如く、百本の腕も拒みます。それらは最早、ジュピターの脇にいる鷲の如く、何ら重要な手段ではありません。少しも評価されない手段でしかありません。人間が君臨しているのです。

他の人生によるものではありません。人間の人生は十分です。常に継続して行くことだけが不足しているのです。完璧な競技者にとっては、円熟期に永遠に止まることだけが不足しています。神とは、ここでは死なない人間のことです。そして不死の長が何時も全盛の姿で現れないとするなら、自分自身だけで自れに打ち勝って存在することに満足して、絶対的に自己と和解したのを記念した思想において、何を行うのでしょうか。以上が不死の人々です。この偉大な観念は、少しも空疎ではありません。競技者の英雄は、この観念の中に住み、この観念を走らせます。この観念は不死です。というのも、この飛躍と力強さにおいては、疲労と老齢と死というもう一つの観念が見出すものと絶対的に相容れないからです。ここに現存している唯一の死は、少しも内的な死ではなく、自己の死ではありません。それは外部の人の死であり、欲せられ求められた死です。丁度良い処の死です。閉じられた場所で立ち向かう死であり、人が打ち勝つことの出来る死であり、人が打ち勝つ術を知っている死です。自らの力強さだけで死ぬことであり、弱さで死ぬものではありません。これは人生の過度によって死ぬことです。この突然の敗北を、戦士は自分のことと考えることが出来ません。戦士は他人のことと考えます。自分自身の裡で、そして自分自身にとっても、それを決して信じません。それが自分の思想の上に亡霊のように降りて来ると、その上を歩き、一跨ぎして抹殺します。その様にして勇氣ある朝になるのです。(完)





## 第六章 ホメロスの神々

神々は人間の諸瞬間です。この思想は抽象的なものではありません。これは『イリアス』の乱戦の中や、ユリシーズの航海の中にも書かれています。更に、神々が人間の姿を取るようになるや否や、それらの神々を認めるのが優雅さ、力強さ、眼差し、忠告、つまり人間として卓越した全ての表徴でないとするなら、人は何を認めるのでしょうか。あるいは希望とか大胆さとか恐れという突然の心の動きを認めるのでしょうか。人間はその時、自分の周りとか背後の友人とか味方とか敵を探しますが、その様な感情や心の動きは至って尋常です。でも、それが見付かるか否かは、殆どどうでも良いことです。何故なら、人間自身が現れたり消えたりするからです。最も濃密な粉塵のある場所に全てを投げ入れる戦闘の激発は、人間たちと神々をごちゃごちゃにして仕舞います。真昼のこれらの幻影は、全てが真実です。哲学と何ら隔たりの無い神学が、新しい神を古代の自然に、又はジュピターを広大な大空に、溶解しようと試みることが出来るので、人間としての真の活動により一層くっついていく時は絶えず汎神論的怪物に勝ち、その人間を極めて自然に超人的であっても単なる人間として描き出しています。というのも不安な雲の中で道に迷い、既に傷を負った敵であろうと、奇跡は戦争には付きものであるからです。あるいは、あっという間に消える勇気とか恐怖であるにせよ、全ての攻撃が一種の予言に導かれて命中するにせよ、当然であるかの如く他人が教えてくれた剣とか弓が勘違いであるにせよ、味方が見えてもいないで敵の攻撃から身を躲すにせよ、悪意からであるかの如く味方から不可解に引き離されているにせよ、奇跡は戦争には付きものであるからです。戦士が亡霊の追跡で道に迷う時、それは激怒による誤りでしかなく、自然の誤りでしかありません。同じ出来事が超自然であり、それと同じものを両眼は見たのです。そしてパタロクロス(1)の死は、軍神マルスによって武装解除され、甲冑を剥がれるように力を剥がれ、まさに疲労困憊した人間の死です。人間は自分自身を認識しません。人間はパンや肉や葡萄酒が沢山の勇気を与えるのを知っていますが、無限でないのも知っていますけれども、それを少しも信じていません。全ての情熱のように勇気の本来の意味は、それとは他の原因を探すことです。神は後押しをする、とアイアス(2)は言います。それは両手と両足が独りで進んで行くのを感じているということです。そして反対に、もしもジュピターが今日、トロイア人たちに勝利を与えるとするなら、それは古代ギリシアのアカイア人たちの膝は最早前進しないことを意味します。これらの隠喩は全て真実です。表現も正確であることに変わりありません。情景も、超自然的に生理学的なものになっています。彫刻家フィディアスが創ったジュピターは、常に人間でしかありません。そして、人間を超えることはないと言えます。何故なら、全くの独りの人間であるからです。従って『イリアス』の戦闘は、単なる戦闘に過ぎません。恐らくアキレスは、河神スカマンデルとも戦いますし、それは宗教的であるよりも神学的なものです。更に、河が突然に急流に変わるように戦うのも真実です。そして実際に起こってもいます。しかし純粋な戦闘は求められて行われるものであり、人間の行いであり、少なくとも人間のものです。全ての驚嘆も、全ての威光も、ここでは人間の形になっています。人間の力として瞬間を、ここで把握しなければなりません。ここでの自然の怪物は勝利を収めたり軽蔑したりしますが、英雄は人間に相応しい唯一の敵です。

それに反して、人間のこの集結と自分自身に面と向かった勇気へのこの黙考によって、自然は自然そのものに反射しますし、ホメロスの直喩が表しているように自然でしかなく、それらは瞬間的に、そして戦闘の最中でも最早歪めることのない情熱とは別の真実を現すようになります。人間たちは小麦のように吹き分けられます。しかし、それらの藁は風に飛ぶ藁でしかありません。雪もイメージにおいては雪でしかなく、物質の法則に従って落下します。ライオンも柵を跳び越えるライオンでしかありません。その牙は牙でしかありません。そして、樵も山中においては樹木を打ち倒し、空腹になる人間でしかありません。アキレスの楯は、これを身に付ける戦士の激怒との最も驚くべき対照によって、成るが儘の自然のイメージ、つまり労働とか結婚とか過ぎたり戻ったりして繰り返されるもの全てのイメージしか眼に提供しません。戦争でさえもそこでは略奪でしかなく、別種の収穫です。それは恰も神の鍛冶屋が、神々は決していない、と書きたがっていたかの如くです。それはまさしく牛の皮と青銅の薄板で、大変正確に自分の力を限定させる武具が意味しているところです。労働が全てであり、全てを行います。それは永遠のテキストであり、人間の真の鏡です。しかしアキレスは本を読む時間を持たず、少しも読む時間を残しません。

全ての戦塵が再び静かになり、死者たちが全て燃えると、英雄が神であるという観念が一本の奇妙な道を生みます。人間の形はまるでこの偉大な秘密に、再び閉じられているかのようです。神々は至る所にいます。道を示す見知らぬ若者は、恐らくメルクリウス(3)です。賢明な友はメントールでありミネルバ(4)です。そしてユリシーズがぼろ着を纏って乞食になって身を隠したように、神が、ずだ袋を持って戸口から戸口へ物乞いすることは十分にあり得ます。賢明でしかないこの驚異的な告知は、英雄的狂気の最も美しい果実です。というのも英雄も常に日常に戻るからです。英雄も食べて飲んで眠るからです。これは私の兄弟であり、人間です。牧畜民たちの火のように木の葉の下に埋葬されて眠るユリシーズは、それでもユリシーズに変わりありません。それ故に人間の形をした者は全て敬意と歓待の信用貸しをしてあげなければなりません。そして恐らく、神がそこに隠れているという観念は、未来が少しもその価値を減らさないというものでもあります。キリスト教徒も、これ以上のことは言わないでしょう。あるいは寧ろもっと良いことを言うべきかもしれません。単に人間であること、そこに神がいるのです。ホメロスが人間の情熱と政治的な些細な術策を神々に招く時、彼は既にそのことを理解させてくれています。時として休戦が断たれるようであればある程に、神々は人間よりももっと意地悪に見えます。英雄も人間よりももっと意地悪であるということです。そして、そのことによってオリンポスの神も、まさしく間違えそうもなく人間なのです。この典型は私たちのためにあり、私たちの好みでもあります。神々でさえも愛されて許される必要があるので、慈愛で貫きます。物乞いする神々のこの偉大な観念は、もう一つの時代と、少しも高慢でない思想を教えてください。競技者の形は既に取り除かれています。人間は、他の表象を幾つも認めています。それは少しも輝かしくなく、見抜かなければならず、乗り越えなければならぬ幾つもの表象です。それ故に私は繰り返して言いますが、シャトーブリアンは崇高な異教徒や崇高なキリスト教徒さえも乗り越えたのであり、『殉教者たち』の言葉は、恐らく最も美しい言葉です。自分のマントを貧しい者に与えたキリスト教徒に、異教徒たちは言います、「多分、彼は神だと信じたのですか」。キリスト教徒は奥深い英知から答えます、「いいえ、私は彼が人間であったと単に信じただけです」。(完)

- (1) パラロクロスは、トロイア戦争でアキレウスの武具を借りて戦うが、ヘクトルに討たれる。
- (2) アイアスは、トロイア戦争時のギリシア方の二人の英雄。
- (3) メルクリウスは、ローマ神話で商売の神で、ギリシア神話ではヘルメスのこと。
- (4) メントールは『オデュッセイア』中の人物で、ミネルバはローマ神話で技術・職人の女神である。

## 第七章 シーザー

シーザーは戦いにおいてさえも、色々な仕事を沢山持っています。彼は自分のイメージで何人かの英雄を作り上げました。臆病者が六人いれば簡単に殺されて仕舞うことをシーザーは良く知っています。シーザーは眠ります。彼は信じています。しかし結局のところ半分しか信じていません。彼は自分のではないあの力で交渉しますが、それは全く自分のものではないのです。全ての神々のこの術策は、全ての神々の弱点です。人を信じさせることは、自分では信じないようにすることです。それ故にシーザーは、同じように愛を返したりもしません。彼の最も大事な友人たちも、ありきたりの仲間と見做されるので、彼には友人はおりません。どんな栄光も平等によって育てられ、平等によって生きます。というのも名誉の選挙は、選挙という名誉によって価値があるからです。至る所で重臣たちは王を不安にします。王にしてみれば無理遣いでも称賛されたいのかもしれませんが。心の奥で尊敬されずに、恐らく軽蔑されるも同じであるならばです。この側面から見ると、王は決して公正ではありません。王は功績を正当に評価したりしてはいけないのであり、外部からの贈り物で食べて行かなければなりません。これは虚しいことですが、大変に由々しい目的のためでもあります。この混淆はあらゆる王にあります。職務としてある欺瞞によっての尊厳は、榮譽を台無しにしています。王たちは信じますが、この私は知っています。かくして全ての王は榮譽を諦めます。そして率直な英雄の面貌は、直ぐに不可解な秘密に覆われます。そこからはメドゥサの頭が石化されて、化石になります。それだけでなく、シーザーは死者たちを生かし、そして最も美しく生かします。それは友愛を凍結させます。既にアガムノン(1)は最早アキレスの鏡ではありません。それは寧ろ敬意を映さない曇った鏡です。そこから齎されるのは、王たちから隔絶であり、神秘であり、不可解で、それは神々の中に移ります。この非人間的な視線が少なくとも確認するのは、見られていないということです。そこから最も身近で忠実な者たちにおいては、ご機嫌を損ねる恐れが生まれます。それはご機嫌を損ねて仕舞うのではないかという恐れです。そして調べてみようとする恐れが、疑っているのではないかという恐れになります。この感情は何人かの勇者を生みます。というのも勇者たちは最早、服従するという慰めしか持たないからで、それが比肩することでもあるからです。かくして、本陣のテントの周りには砂漠が生まれます。結局のところ権力は、人が愛するのを望むようには決して愛されたくないのです。権力という宗教はそれ故に、心底から間違っていますし、心底から陰鬱なものです。神学者たちは恐怖も無くこれを見詰めません。何故なら、彼らは明白なことと不可能事の提案を見分けているからです。「譬えお前が神に何かを与えても、それを神自身に自ら与えるのが神である」。人は何らかの形而上学的難問があるように信じたいのですが、それは昔からの虚偽を哲学的に偽装させる精神の術策でしかありません。如何なる戦いの長に対してであろうとも、彼が要求するものしか人は決して与えません。そして忠義は、もし自由でなければ台無しにされますが、強制されていなくても侮辱的なものになります。ここに武装された政治の全てのドラマが収斂されていますが、それは歴史が偶発的に歪めるものです。反抗は服従の中にも閉じ込められています。戦闘の中にもあります。でも、実行者は死ぬという緊急の事柄があります。そして人間は礼拝の段階にあつては、昔の王とは違う神々を持たないのですから、憐れな人間



たちの上にもジュピターの視線が理解されます。この視線を望むのは決して彼ではなく、望んだのは憐れな人間たちです。アキレスは自分自身を引き裂きます。そして、それを償うのは敵です。上に立つ者はじっと待ちます。多分、戦う人間たちの憤怒は、その様にして崇めるこの無感動の神から全てやって来るのです。

ティベリウス(2)はシーザーよりももっと悪く、その王宮は野営地よりももっと悪いのですが、野営地のイマージュも保存しています。人間や事物を整えて数えるのは行政であり、精神が力の上に聳え立ち、計算によって支配されるようにしています。そして監督官は、自分の名声が失墜することからも守ります。この様にして会計官は、戦士よりも上位にいます。何故なら戦士は下位にいるからです。英雄の世界がひっくり返ります。そして最も卑しいおべっか使いが、嘘偽りの無い、あるいは嘘偽りの無いように望んでいる兵士よりも優位を占めています。というのも部下が弾薬入れに、嘘偽りを持ち込むからです。この様にして権力は、手段をすっかり軽視することによって台無しにされます。警戒は計り知れない野蛮な者たちで行われます。そして〈諜報機関〉は、大英帝国が適確に激しく言っているように、その職務によって虚偽なのです。自らの意志で盲目になるこの帝國的生き方には、精神が自己から他者へ、そして自己から自己への恐ろしい沈黙がなければ、権力と結婚出来ないことを人は見抜いています。虚言を吐く占星術師や律義を装う道化者は、ティベリウスの二人の仲間です。そしてティベリウスも、人がこのことを知ってくれることを良く望んでいます。この様にして、決して笑いの無い嘲笑的な秩序が確立されます。人はそこから神を創ることは出来ません。しかしマキアベリにおいて、永遠の姿で描かれて何世紀も常に同一の儘であった君主の力は、少しずつユダヤ的な矛盾、ヨブの苦難やイサクの犠牲の方へ私たちを高めて行きます。それらは自分自身との専断による激しい戯れのイマージュです。

オリンポスの仲裁におけるジュピターの気まぐれは、お人好しで田園の記念祭に従うものであり、家庭的愛情と女神ユノー(3)との諍いによって常に節度あるものになっています。運命が時々姿を見せるのを除いて、王であるのは必然性でしかなく、運命は王よりも優れています。現実の家庭において、父親も事物のように厳格で情け容赦の無いものです。というのも父親は事物の大臣であるからです。もしも収穫が少なかったなら、一人ひとりの割当てを量らなければならないからです。割当てとは理性であり、理性とは優しさではないのです。しかしながらジュピターにおいての運命は、戦いの力と術策の力との混合によって、より一層王の近くにあり、王座の影の中にあります。ジュピターが不死の英雄たちを少しは遊戯させ、自分自身でも人間のやり方で饗宴と恋愛の楽しみを遊戯した後で、運命を見出すのはその時です。運命はジュピターを引き寄せて、楽しむために王座に就いているのではないことを思い出させます。というよりも寧ろ、彼は自分自身の力の奴隷です。彼が自分の背後に感じるこの盲目の力は力そのものであり、絶対的な外部の掟ですが、王としての内部の掟でもあります。最も古い掟の規範は専断的命令です。それは誰のものでもなく、そして一つの意志の如くに言われるものであり、〈神託〉です。王の背後に王がいる如く、最高神の背後にも神がおります。けれども非常に恐ろしいこの観念は、人間がシーザーによって可能になり、シーザーが人間によって可能になる限りは、常に身近なものであり得るでしょう。というのも服従の規則によって、国家的理由が理性になることは出来ませんが、君主の発言は取り返しがつかないからです。精神は言葉を完成させます。それ

故に、それは偶然によるのではなく、人間によって構築されるものであり、その弁証法は最後に侮辱された精神に君臨するものです。でも、英雄はそのことを望みませんでした。（完）

（1）アガ멤ノン、ギリシア神話でトロイア戦争時のギリシアの総帥。女神アルテミスに怒りに触れ、娘イフィベネイアを犠牲に供し、妻クリュタイムネストラの恨みを買って殺される。

（2）ティベリウス（前四二頃～三七）は、第二代ローマ皇帝（在位一四～三七）。治世後半には恐怖政治を行った。

（3）ユノーは、ローマ神話で女性や結婚生活の保護神である最高女神。ギリシア神話ではヘラ。

## 第八章 メルクリウス

毎日食べなければなりません。この世の全ての英雄たちも王たちも、色々な職業、交易、物とお金の二つの流通、金貸し、銀行家、吝嗇家たちによってその榮譽が齎されて手に入れます。ティベリウスもシーザーのようにそれに繋がっていますし、非常にしっかりと繋がっています。略奪することは、生産することではありません。全く反対で、それは生産者にとって厳格でなければならないものとしての生産を減少させるものです。人間よりももっと迅速に、そしてより上手に隠して仕舞う貯蔵を、先ず心配し恐れるものであります。武装した集団は、お金の支払いには気を遣います。そして戦争は、家畜飼育者や御用商人たちを戦争の外に置くことに何時も注意します。その様にしてもう一つの法が姿を見せますが、それは純粹に誠実なものです。というのも商店が、受け取ると同時に与えるという交換は殆ど無いからです。約束だけで或る場所から他の場所へ財産が移動するからです。それ故に戦士は、市場を守っているのです。

値段を押しつけることが出来ないのは誰もが知っています。この点から全ての市場は自由です。購入するのを拒否したり、同じく販売するのを拒否したりするのは、強制を前にして単に逃げ出すことではありません。これらの拒否は、値引きやせり上げによって白昼に表示しなければなりません。言明するのと同じです。何故なら、シーザーによって示された適正価格は、公設市場の値段であるからです。そして、この適正価格が無ければ、最早信用も通貨も無いからです。貨幣上のシーザーの顔は沢山のことを意味しています。シーザーはそこでは誠実さを保証しています。シーザーは、人の手から手へ渡るこの金属の中で、王であることを辞めています。王の署名はその重さを保証しますが、秤も近くにあります。正義の詩が、この金の秤を発明しました。そこでジュピターは運命の重さを量ります。というのも色々な武器も、秤の盆の上にあるからです。英雄たちも同じであり、神々も同じです。審判者である秤という象徴はそれ故に、シーザーが望む以上に多くのことを語っています。そうして、そのことを言っているのもシーザーです。この様にしてシーザーは天空の正義を広めて行くのであり、大空を支配するものではありません。

これらの矛盾は、もしも私たちの最も小さな思想の中に先ず宿っていなかったなら、神々の中にも決して無いでしょう。宮廷では全てに分配の正義があり、それは功績を作り上げ、直ぐに廃れさせます。善も悪も偶然であるかの如く直ぐさま与えられます。というのも、権力は規則というものを望みません。もしもおべっか使いに期待しているものが与えられたなら、それは余りにおべっか使いに屈服することになるからです。特別待遇は宮廷の通りの至る所にあり、常に説明し難いものです。この観念は最も崇高な神学の中にも齎され、厳格なジャンセニストの絶望を生みました。というのも、絶対権力を当てにすること、そして自己を当てにすることでもある絶対権力を、それは明らかに侵害することであるからです。ところで商売は、この奇妙な法に屈服しますし、暇な時間の時にそれを働かせることでさえあります。というのも権力の本質は、威厳とは無縁の者たちの中で自らの姿を映し、売台でふくれっ面をするような虚栄の性質にあるからです。そこからピロトー(1)の不運が生まれます。しかしもう一つの正義である交換の正義が、より良くその中では確立されるばかりです。市場の噂は榮譽の噂とは別物です。思考の中で絶え

ず働いている収支勘定の前では、名誉さえも消えて仕舞います。

王の正義においては、一つの不正義が爆発します。厳格に履行される約束そのものが一つの罫であるので、市場の正義の中にも一つの不正義が隠れています。買い手と売り手という両者の駆引きは、両者の虚偽によってしか行われません。というのも、彼らの一人ひとは常に相手を必要としない振りをするからです。買い手は自分が貧乏であることをひけらかし、売り手は自分の裕福をひけらかします。何故なら、一方が値引きを包み隠し、もう一方はせり上げることを包み隠しているからです。農民たちの際限の無いあの取引にもそれは明らかに見て取れますが、これとは対照的にその結末は厳格で宗教的なものです。全く純粹なその誠実さは、ゴブセック(2)のものと同じです。そして術策と忠実さのこの混淆は、計り知れない面貌が信用されるものになっている処に原因があります。しかし浪費家たちは、二度も彼らから剥ぎ取るこの二重の力を理解することが出来ません。それ故に、商売は盗みであるということが決まり文句になっています。そしてゴブセック自身はそのことを笑っています。というのも良い芸当は、常に良い芸当であるからです。ジュピターはそのことを何も考えませんが、メルクリウス(3)を送り出します。何時も天上から急降下するこの神は、支配する精神と法の精神に関係を作ります。これは人間たちが上手く進むような人間的物の神です。良く見てみるとこれは悲劇の敵です。下位の秩序を救い出すために来るのです。詩人ホラティウスは質素な祝祭にメルクリウスを招きます。「メルクリウスを忘れるな」。これは人が指と指との間から洩れる光輝く金属に与えられるのと同じ名です。この神の足元の翼は勝利のためのものではなく、寧ろ割引と補給の疲れを知らない原動力です。これは急を要する精神です。全てのことを思考する神です。神話も又、この神のことを思考しました。

あなた方はこの神のことを全てご存知でした。葬列に沿って軽やかな黒いマントがひらひら舞っている神です。一日中、相続者に喪服を着せるのもこの神です。黒い杖で亡霊たちを引き連れているのもこの神です。亡霊たちを宥(なだ)めるのはこの神です。そうです、この同じ神が明日は市場を走り回り、この同じ神が証券取引所の鐘を鳴らすのです。閉会や大引けの神です。決して適正でない適正価格を自分の名で掲示する神です。以上は、ジュピターも最後には副署する正義を、数々の術策で成就させる曖昧な神です。神々の中のその神は言います、「人間たちは自分たちの不幸が自分自身の愚かさによる時に、それらの不幸を私たちのせいにする。しかしながら私は、彼らに警告するメルクリウスの元へ連れて行くが、これも全く無駄である」。これらの美しいイマージュはそれ故に、私たちの全ての思想をしかるべき場所に置いて整理し、先ず以て常に規制してくれます。というのも、如何に見事に射られた矢も、ジュピターやメルクリウスには何もし得ず、それらの神々は使者に過ぎないことを何時までも知っているからです。権力は全てが同じであり、市場も全て同じです。そして神々は、まさしく人間の姿のイマージュになっています。というのもオリンポスの神々の属性も区分も階層も、人間が解決して決心しなければならないあの抗い難い諸関係を表しているからです。そして人間に対する人間の用心は、〈地獄〉でも見付かります。というのも、どうしようもなく他に拠り所の無い審判者であるミノスとアイアコスとラダマンテウス(4)は確かに昔の王たちですが、神々の段階にまで高められなかったからです。人は神々に裁きを請求しますが、神々は決して与えません。人は決して人間にそれを請求しません。何故なら、人間が与えるのを知っているからです。これらのイマージュが一般的

になるにはプラトンで十分でした。プラトンはこれらの見詰めることしかしませんでしたし、極めて良心的に何も変えようとしませんでした。信じることと知ることとは見分けて、注意して下さい。その代わりに無謀な批判は、私たちを一つの信念から他の信念へ移動させます。あの有名な〈洞窟〉の寓話は、このことを全て、そしてそれ以上を語っています。というのも、影というものが騙すのは本当ですが、それらの影が全ての真実であるのも本当です。壁に映った樹木の影が、樹木の真実と壁の真実と月の真実を収斂しているかの如くです。あなた方は、神々には間違いが無いと知る時に、全てを知るでしょう。（完）

（1）ピロトーは、バルザックの小説『セザール・ピロトー』の主人公。香料商人であるがお人好しで、社会から葬られる。

（2）ゴブセックは、バルザックの小説『人間喜劇』の登場人物。吝嗇家として有名なパリの金貸し。

（3）メルクリウスは、ローマ神話で商売の神であり、ギリシア神話ではヘルメスである。

（4）ミノスとアイアコスとラダマンテュスは、プラトンによればいずれも冥府の三判官の一人である。

## 第九章 イソップ

奴隷は一種の動物です。兎に角、人は奴隷のことを忘れていなければならないし、奴隷が考えることは誰も関心がありません。この時、奴隷は全てを繰り返さなければならないでしょう。権力と秩序の神々も、そこまで視線を届けません。それは、神々が自らの否定、明白な否定をそこに見出すことになるでしょう。というのも、暴君が絶えず予知してあらゆる段階で大臣たちから離れた結果により、神の権力は人が同意を最早心配しない時点で死ぬからです。もしも奴隷の信じるものが少しも重要でなくなることでしかないなら、誰もが奴隷を信じさせることは何もしたくないのです。この明白な支配は、支配そのものを破壊します。田園生活はこの様にして動物たちを管理しますが、それは一種の宗教でなくもありません。しかし奴隷の神を生むことが出来ないのを、良識は知らせてくれます。何故なら人は一種の動物の思想をうまく発明することが出来ますが、奴隷の思想は絶対に否定しなければならないからです。そこには古代の思想が持っている欠如と空虚があり、帝国の全ての思想において同じです。というのも、そこには上から下までに奴隷的な部分があるからで、それらは恥ずべきものであり、曖昧な儘です。

最も偉大なものは人間を生みますが、それは奴隷が思考することでもあります。そうしてそれを証明するものが〈寓話〉です。高所からやって来る恐ろしい程の圧力によって、この思想は全て自分の条件を受入れる唯一のものなのです。〈寓話〉が大胆な隠喩で、動物たちに思考させたり語らせたりして人は驚嘆しますが、それは決して剥き出しにならないように調整されています。従って攻撃することはありません。何故なら、動物たちが話をするのは決して本当ではないからで、人間が動物であることも決して本当ではないからです。全てが虚偽である時に、真実が姿を見せます。既に十分ご説明したように、数々の虚構には一つならず理由があります。しかし、この本質的な虚構は次のとおり、十分に説明されます。決して断念しない権力の秩序に従えば、如何なる真実も語られることはあり得ません。喜劇的なものは恐らく、自ら信じ難いものを生み出すための法則と見做されます。そして最も古い喜劇は、絶対的に信じ難いものでなければなりませんでした。王が寓話を聞いたなら、王たる者は自己に戻る権力を守らないという訳はありません。勿論、王は全部守ります。寓話作家は極めて巧みに動物たちの劇場を保ち、教訓的にならないように注意します。でも、教訓そのものは安心を与えます。というのも、それは人間に適用されるからですが、全てが変えられて仕舞います。それは最早比較でしかありません。その代わりに寓話の真実は、恐ろしいイマージュの中に全てがあります。そこには変えなければならないものは何も無く、和らげなくてはならないものも何も無く、移動させなければならないものも何もありません。話をする動物たちという唯一の虚構が、如何なる偽善も無いような力の働きを表現しますし、それ故にそれはあるが儘なのです。というのも偽善は包み隠すが、何も行わないからです。そして、そのことそのものは奴隷の発明であり、奴隷が行うことが出来る唯一のことなのです。もしも人が秩序を利用するのが少なければ、それを大切に扱うでしょう。

それ故に、そこには叙事詩と反対のものがあります。偉大なものは全てが否定され、完全な無神論です。ライオンが一番強くて皆の分け前を自分のものと見做しても、誰も感心しません。人は爪が動くのを見ますし、それで全てが語られています。生きるものの各々の姿がなり得るこ



とを、正確に行います。狐とコウノトリのフォンテーヌの寓話は、この観念を極限まで行きます。猫は木によじ登りますが、狐には出来ないことです。全ての英知の方策は、脚の長さを測りに行きます。脚で行ける処までで捕らえることが出来ないという観念は、決して生じません。史的唯物論と呼ばれている体系も、そんなにも遠くへ導きませんし、ホッブスにおける唯物論も同じです。そこでの神々とその忠誠は結局のところ、剥き出しの力よりも有用です。プラグマティズムと命名されている有名は観念でさえも、有用な虚偽であり、信じることなく働かせられるなら、有用でしかありません。番人の関心は嘗て主人のために殺されるようになることである、というのは絶対的に虚偽です。権力への陶酔がスパルタとかローマのために死ぬのを導くということも、絶対的に虚偽です。ソクラテスが言ったように、他のことがあります。精神にはそれ自体でなすべきことがあります。ある種の手段においては内部的な不名誉もあります。ここには真の宗教が姿を見せますが、何時も否定されます。恐らく、プラトンを信じ込む人間は一人もおりません。何故でしょうか。美德が恐いのではなく、自由な精神という乗り越え難い観念が恐いのです。更に、自由な精神、既成の数々の真理、解けない幾つもの矛盾、ついには私たちの腹立たしい神学という最高の支配者を発明しなければなりません。しかしながらその体系は精神が自由でなかったならばあり得ないことで、唯物論者であっても明白なことです。というのも、唯物論そのものは少しも強いることがないでしょうし、寧ろ反論を加える一つの方法と秩序を前提にしているからです。そして唯物論は、精神の暴動を否定しなければならなくなるでしょうが、それこそが唯物論の心髄です。古代ローマの哲学者ルクレティウスの体系は、ルクレティウスを否定します。そして体系そのものを否定します。その様なことは人間であることが不都合なのです。それは短い劇の積み重ねによって寓話が消えて仕舞うことであり、そこでは類似という観念そのものが絶えず否定されています。人間はそれを見詰めるのであり、そこで自分の姿を見たりしません。これは動物や物を擬人化する考え方とは反対そのものです。そして、擬人化は至る所にある如く、寓話も至る所にあります。前者においては精神が自分自身のように見えますし、自分自身にも恐怖します。後者においては明確な線によって如何なる神秘も無く、精神は熱心に自分自身を抹殺します。教訓は動物的生活の全く単純な法則を人間にも適用するので、教訓そのものは少しも精神のものではありません。人は判断しようとしませんが、少しも判断しません。精神はそこで自由を試みますが、それに決して義務を負わせたくないのであると言うに至ります。これは考察を先に延ばすことです。この術策が、首尾一貫した合理的な唯物論を可能にしました。仮にそこには、弱者たちの友愛と相互扶助が残されているとしましょう。しかし、ここでも又、類似の観念は排除されています。鳥やガゼルや亀や鼠が表題になっている有名な話は、それ自体が破壊的です。それでもなお、「二羽の鳩」や「二人の友」(1)が思考のオオシスであることに変わりありません。全ての魂は可能な如くに自己を救い、絶対的な奴隷というものは決しておりません。兎に角、どんなに小さな権力でも友愛を排除するのは事実です。この厳しくて砂漠のような過酷な見方は、権力が神でないことを十分に示しています。今も良く示していますし、嘗ても権力が神でなかったことを示しています。人が絶対的に正義を否定する瞬間とは、偉大な瞬間であり、一人ひとりにとっては永遠の瞬間です。全ての観念と同様に、正義もイマージュの中で自らを見失います。従って、不在は現存よりも一層真実です。更に、精神は人間の背後にあります。常に背後にあり、数々の影を投じて、影の影を投じるのであって、それ以上のものは決し

て何も投げません。ヘーゲルは、主人と奴隷の対比から偉大で力強い観念を引き出しました。そしてヘーゲルが言うように、奴隷は最も稀有な美德と最も正確な観念を必要にせまられて形づくりますが、それに反して主人があるが儘の状況から美德を失い、精神を見失うのは本当です。その様なものがヘーゲルによれば、歴史の主要な発条であって、それが不可避の王位剥奪によって終わりの無い革命になっているのです。しかし、言うべきことは常に残されているでしょう。というのも、私たちの最も些細な思考においても、常に何らかの主人は失権し罷免されているからです。确实であることを疑わない人間は、決しておりません。でも、それは确实であることと同じ観念です。しかし、それが哲学です。現在の探究において、取分け継続して行くものについての困難は、寓話から寓話へ如何にして精神と同じ観念が、最も美しい影を形づくる人間の身振りによって、何の間違ひもなく形成されるのかを見ることです。（完）

（1）ラ・フォンテーヌの寓話。

## 第十章 機知

精神は嘲笑的です。日常の言葉遣いは決して欺きませんし、力強い忠告を私たちの顔に投げつけます。権力の周りや権力の内部においてまで、機知はひらひらと飛びかかって人を喜ばします。何時もそれで十分です。笑いは纏れた結び目を解きます。私たちは直ちに首吊りにされないことで十分に満足します。というのも、私たちは大変に真面目であっても、自分の紐に吊されることもあるからです。そして、不安が支配する機能の最も通常な効果であるように、重力は常に力の最高の象徴であるからです。でも、機知は瞬間的に私たちを解放します。これは予言することよりももっと良いものです。機知は直ぐさまに、そして常に友であり救済者です。ヴォルテールはその様にして長生きしました。あなた方も出来ることなら最良の人々を見出して下さい。それまでの間、私は呼吸していなければなりません。跳ね回ることも必要なことです。笑いが生真面目さの結果であることを良く理解しましょう。それは生理学的反作用であり、緊張の中断です。それ以上のものでさえあります。気分を変えるこの突然の動きは、動物にもあります。些細なことでも気が変わります。でも、人間の人間らしい処は、この自由な感情を保持して広めることです。自己における自由、自己の自由というものが思索の最初の目的であり、この目的とは笑いです。機知はそれに慣れて、自ら試そうとして確信します。笑わせるためには、時には真剣に見通すだけで十分です。そこから極端な論理が笑うべきものである、と納得させられます。事物を言葉として整理すれば十分です。その様な機知は経験と衝突させることなく、それらを行うことになります。災難が観念にしか達しないで実害が無い時は、その災難は独りでに笑わせます。かくして或る男が道理に従うと、その椅子は崩壊します。少なくとも、この種の笑いにおいては少し無意識なものが多くあり過ぎます。機知が内面的災難において自らの力を感じるのは、一番良いことです。それと同一の形式の中や、同一の形式によって予見し難い偶発事のようなものは、選ばれた対象です。人が機知と呼ぶものは、常に精神の純粋な構造に近付きます。マーク・トウエーンの有名な双生児のようです。双生児は、もう一人の双生児が昔浴槽の中で溺れて死んだと語ります。しかし、つけ加えて言います、「それが彼なのか私なのか、私には分からない」。重大な危機がここでは非常に急を要しています。それは多少なりとも何時もあることです。カントは、深く悲しむ人間の例を引用します。「彼のかつらは一晩で白くなった」。又、一種の憂鬱家チャンスネツスについてのシャンフォール(1)の言葉にも「スペインに幾つもの牢獄を造る」があります。それ故に機知は多くの影響力を与えています。

如何なる影響力でしょうか。結局のところ次のとおりです。諸観念を壊す力は、それらを生み出す力を堅固にするのです。無限という、厳密には二つの無限においては、何か滑稽なものがあります。ドイツの数学者カントールが言うように、対になっているブーツの数が無限であるのに、確かに対の数はブーツの数の半分です。しかし笑いは、純粋な平衡を保ったこれらの試みにおいては、まさに必要なものでもありますし、プラトンはそのことを知っていました。プラトンは、最も真剣な発見をしようとしている時も、笑う術を知っていました。従って『国家論』で正義が他の三つの徳の定義によって範囲を定めているのが分かる時も、人は未だそれに気付くことがありません。狩りの名人であるソクラテスは「タイヨー、タイヨー」と獲物を目視した時の合図

を叫びます。この様な用心は殆ど理解されていませんし、恐らく真剣さにも欠けているのです。自惚れに対する用心が常に人間を窺っています。それは自己に対する自己の用心です。汝は自己を信じてはならないのです。精神が主人でなければならず、まさに落ちようとしてもぶら下がっていなければならないことを、最も良く感じさせてくれるこんなにも表情豊かな身振りは、今までありませんでした。プラトンが常に行っていることですが、それは精神の創造を神々の如く崇めている永遠の誤解を避けることです。ここには数々の証明に陶酔する熱狂があります。しかし機知は、この熱狂と真っ向から対立します。それ故に、精神の英雄たちの間に、常にヴォルテールを引用しなければならないでしょう。この名誉を彼は拒んでいますけれども。いや、まさにそれが拒んでいる理由なのです。精神は何ものでもない、と機知が言います。機知の一つ一つの辛辣な言葉で体系は死にます。一つの体系は同一の運動によって完了し、そして壊れます。一息で十分です。あなたはその運動に筋肉を用いようとするでしょう。天空におけるこの闘い、予備的と名付けなければならないこの闘いは、常にそうあらねばならず、魅惑の神々が死ぬ危険を負っているその瞬間に、それ故に自己の位置を今ここに見出します。ポリュクト(2)は古代の神々を壊しました。それが彼の信じる方法です。彼は力不足を恐れます。そして、如何なる行動にあっても、的を外れて行うことがこの恐れなのです。

人は懷疑論者を間違えます。何時も間違えます。モンテーニュは、真面目さが全てを失うのを自覚する彼の極めて真面目な企てにおいても、屢々誤解されています。純粹に演習である偉大な一章が、他の幾つもの章を圧倒します。そして、それは大変に愉快なものです。というのもそれは反対に、それらの章の風通しを良くするようになるに違いないからです。モンテーニュに関しては少しも疑いがありません。寧ろ疑いそのものは、真実の周りを取り巻き、嵌め込むための道具のようなものになるに違いありません。例えば雄弁や勇氣や恐怖や服従や習慣や法や戦争と平和についての、彼の全ての判断力において生まれます。それらは自分を騙すのを拒否することで堅固になります。この深みのある仕事には、対壕が坑夫の上に崩れて来ることは決してありません。「驢馬よりも真面目なものは何があろうか」(3)。そして、あの有名な神学者の鷺鳥の話は(というのも、この巨大な宇宙が鷺鳥のために創られたのは明白でないのだろうか、とその鷺鳥は言うから)、私たちが自分たちの力学的な思考から目覚める、反論出来ない変形の一つです。その不条理は、不条理が創ったものの外部へ理性を投げ返しながらか、理性を救済しますし、それは何時も不意に爆発する驚きによります。モンテーニュの話で最も美しく、感情に湛えるものを何時も引用すべきでしょうか。この息子は主人になって、父親の髪を引っ張って行くのです。父親は何も言いませんが、家の曲がり角まで来て叫びます、「生まれ、息子よ。だって私は父をここまでしか引っ張って来なかったから」。人はこうした衝撃から決して容易に立ち直りません。もしも理性が理性に過ぎないものであるなら、人はそこで鉄の法則であるに違いない巨人のような見方を身に付けることでしょう。その後で、相変わらず私たちの作者から木製の碗の寓話とか、もっと控え目ですがやはり同じ熱烈な陽気さを帯びていると意味するものとして、引用しなければならない。子供が小さな碗を作っていますが、その碗は祖父がスープを食べるようなものに見えます。子供は、誰のために作っているのか聞かれます。そして父親にも聞かれると、「父さんのためだよ」と子供は答えます。この描写のやり方には、如何なる秩序も逆らえません。しかし、私はもっと軽い調子で終わりにしたいと思います。ヴォルテールは言います、「私の

妹である草よ、ここにやって来るのは恐ろしい怪物で、私たち二人は一口で食べられて仕舞うのだ。人間たちはこの怪物を羊と呼んでいる」。体系も博士たちもごちゃごちゃになって倒れます。小説『カンディード』は深遠な書物です。何故なら、全てを解体しているからです。あの有名な王たちの饗宴は、あらゆる偉大さから身を引いているから、偉大なものがあります。パングロス博士(4)は、上手に理屈を言います。人々は反論できずに笑います。元老院議員ポコキュラント(4)も極めて繊細な趣味の持ち主であるために、最早何ものも愛していません。「私は自分を風景に描写します」とロマン・ロランの劇『リリユリ』の中で、夢想家のギョーが言います。「しかし、君はそれを見ていない」とポリシネルが言います。「私には見えるよ、見えるよ...」。「両眼を塵の中に突っ込んで見るのかい」。「私はもっと遠くを、もっと高くを見るのだ。私は頂きを、光を見るのだ」。おゝ、詩よ。神々は去って行きます。神々と共に復讐の女神フリアイも去って行きます。(第三部・完)

(1) シャンフォール(一七四〇～九四)は、フランスのモラリストで、貴族社会における彼の精神は高く評価されている。恐怖政治と闘い何度も投獄され自殺した。死後の一七九五年に『格言集』が刊行された。

(2) ポリユクトは、コルネイユの韻文悲劇『ポリユクト』(一六四一～四二)の主人公で、信仰と夫婦愛との葛藤を描いている。

(3) モンテーニュ(一五三三～九二)三の八「談話術」から。

(4) ヴォルテール(一六九四～一七七八)の小説『カンディード』(一七五九)の登場人物。

## 第四部 聖クリストフォロス

### 第一章 精神

〈精神〉の宗教には、多くの源泉で溢れていました。少しも自己から自己へ構築されたものによるものではありません。これが哲学なのでしょう。そして、十分にお分かり戴けたように、危険が無い訳ではありません。寧ろそれは新しく、感動的で、人の心を巧みに掴む隠喩で構築されています。その上もしも探究したいなら、精神と同じ位に古いものです。全ての神々は至る所で一緒です。そして異教徒全体も既に精神を身に付けていたので、異教徒が叩く樹木に巻き付く閃光によるかの如く解放された精神になっています。そしてこれらの雷の痕跡は、より多くの古い神殿や泉の祭壇を繰り返し崇拝の対象として来ました。それは常に犠牲であり、力であり、ジュピターであり、牧神パンです。しかしながら、ジュピターの傍らにいる鷲のように、それ以後は権力も下級のものになります。そしてそれらの傍らでは、人は何も見ません。権力から遠い十字路で人が見るのは、十字架の二本の木の上で処刑された一人の人間です。もしも精神の観念が形づくられていると思ひ込んだ人々を屢々絶望させて、身に付けている困惑や矛盾という何らかの観念が無いなら、数々のイメージを持つこのテキストを人が解明出来ると、敢えてそれを試みようと思うことさえも私は考えません。それ故に、真剣に精神を身に付けましょう。もしも人が決して与えられもせず創られもしないことを永遠の不在という一言で語る事が出来るなら、精神は数々の与件の一種の検討のためのものです。

第一のものや最高の逆説は、精神には決して無いものです。私たちは存在するものを引き止めるための幾つかの厳格な方法を持っています。それらの網は観念のものであり、経験の中に投げ込まれます。それらは人が申し分なく質問しさえすれば、一般的な良識に従って独りでに定まります。幾つかの観念により、又はそれらの観念に基づいて作られた道具によって、全てが準備されて全ての罟が張られると、注意深い眼は星が月の背後に消えて仕舞うかどうか、そしてそれは何時であるのかを言うでしょう。彗星は動くかどうか、それはどの位か、そして何との関係によるものであるのかを言うでしょう。目盛りの上を動く針によって示される潮汐が昨日よりも今日が高くなるかどうかを言うでしょう。この方法は少しも議論の余地がありません。ところでこれらの方法によって、人は何処にも精神を見出しませんでした。人が見るのは傷と傷跡だけです。押す物体と押される物体であり、不変で単に姿を変えたエネルギーであり、再び発見した手品の小球しか人は決して見ません。善意の奇跡と半ば善意の奇跡であり、そしてコップの手品であり、全てのコップはテーブルの上でひっくり返されて陳列されていました。そして、何度も証明されているのですが、食べ物を摂らずに英雄は最早、指一本も上げることが出来ません。精神は何も出来ませんし、何ものでもありません。

私は考えます。この力が、風景を変えることは何もないことに同意しましょう。でも、この力はあるが儘でも広大です。知ることは数々の事実を集めるので、一つの事実ではありません。知覚することは数々の場所と物体を私たちに表すので、一つの場所や物体におけるものではありません。その場所でさえも、一つの関係以外には何もありません。一つの事物は遠くにあるのでは



なく、近くにあるのでもありません。というのも一つの事物が過ぎ去ったなら、最早何も無いからで、そして保存された事物であるなら絶対的であり、常に現存しているからです。何ものでもないこれらの関係の認識であっても、少なくとも想像出来る幾つものあらゆる困難の中に投げ込みます。何故なら、少なくともそれらの困難を想像出来ることによって、それらは私たちの全ての観念に共通した非在と同種のものを所有するからです。しかしながら形式を無にすることによって、自分を騙すことさえもあるこの力は、まさしく何ものかでもあります。私は自分自身に戻り、そこから他の幻影として出発しているように見えます。私は自分の声以外には何も見出しません。

絶えず未来の空洞を 魂の中で高鳴らせる、  
苦渋に満ちた、陰鬱な、響の高い貯水槽を。(1)

魂の中なののでしょうか。外であるなら、中とは何でしょうか。ほら、私たちはあるが儘に、数々の事物の中に既に一度は存在しているのであり、存在しない数々の関係によって、あるが儘に存在しているのです。

しかしながら精神は突進します。そして高く、低く、限界まで、あるいはそれを超えて、小さなものの中にしろ大きなものの中にしろ、更に倍加するのと同様に、更に分割する如何なる苦労も無く、諸存在の全ての延長を絶えず走り回ります。それら数字は聖なるものの象徴です。というのも、最も小さな数字でもそれを分割するにも、最も大きな数字でもそれを超えたり倍加したりするにも、一単位として理解するにも何でもなく、少しの苦労も無いからです。限界が如何なるものであろうと、精神は此岸と同じように彼岸でも私たちに待っています。精神は他の様々な物体を認識するので、一つの物体に要約されることが出来ないと言うのは十分な言い方ではありません。精神は内部にも外部にもありません。精神は全て全体です。認識のその向こうで、数々の領域が重なって思考するものです。そして、あらゆる可能性がそこにあります。又、自らを否定したい時にも、なお精神はそこにあり、自分自身の死においても精神はそこにあります。人が存在を如何に遠くへ延長しても、精神はもっと大きいのです。それは精神が限界を超えることを単に意味したくないのです。精神の限界という観念そのものが不条理なのです。というのも、限界とは単に思考されたものであり、二つの側面を持っているからです。前もって精神は全てを超えています。精神は存在しないと人が言う時、精神は存在以上のものであるのを人は理解します。この簡潔な叙述は、かくしてあらゆる誇張された神学の表現法を超えています。

最も高度な逆説とは結局のところ、精神は一つであり、分割出来ないということです。もしも、こことそこの間の統一性が断たれたなら、最早ここも無ければそこも無いでしょう。宇宙は前もってですが、一つです。宇宙を、二つに分割されたと思える以上、それらは一つでしかないのです。この様に宇宙はそこでは何も出来ない時であっても、一人でいる者でもありません。恐らく精神を思考した唯一の人物であるスピノザは、延長は分割出来ないことを指摘して弟子たちを驚かします。そして実際に、二つの延長の間に延長が欠如することはあり得ません。それは既に、単一という一つのイメージでしかありません。しかし、各人が単一を思考する如く、スピノザは単一を思考した唯一の人物でもあります。というのも二つの空間が、常に唯一の空間の

部分部分であるのと同様に、二つの精神も一つでしかないのと同様であるからです。全体の全ては、自己自身とも一致していて同一です。というのも、もしも複数と数えるなら、複数と数えているのは全体であるからです。一つは自分自身の中でしか作り直されない以上、自分を作り直す必要がなくて常に予想されることであるからです。全ての可能な神秘は、それ故にここに集まっています。人は可能なものとしてそれで満足します。説明と証明がここでは絶対的に欠けていることを知らなければなりません。説明なのです。何故なら、部分部分への分割とその集合は、精神による統一性によって行われるからです。ですからそれは、それ自身で合成されることも分解されることも決して出来ないからです。証明なのです。何故なら、あらゆる証明は懐疑論者でさえも普遍的精神を前提にしているからです。数々の幻の出現やその力を解明することなく、これらの事物を垣間見る人々は、精神による崇高で力強く熱狂的な宗教を隠喩によって創り上げました。その宗教はそれら全てを成就し、それら全てを破壊し、一人ひとりの祈りにおいてそれ自身を危うく破壊しそうです。この種の怒り易いニヒリズムは最早、宗教を優しいものに戻したりしません。復讐の女神たちも、稀有で残虐な罪を追跡していました。精神の宗教によるなら、罪の中のその罪は誤りです。ラマルチーヌは回教徒の有力な首長を訪ねた時のことを語っています。彼は礼儀正しい男で、この上なく丁重に歓待してくれたことを言っています。そうは言っても、もしも誰かが単に会話においても一神としての絶対的な神を疑ったなら、彼は直ちに精神のこの単純な過ちを、一命を賭して報いたことでしょう。私たちの近代の火刑台は、この様な混濁した光で全てを照らしています。（完）

（1）ヴァレリーの詩「海辺の墓地」の八連目（鈴木信太郎訳）

## 第二章 精霊の民

ヘーゲルはユダヤの民をその様に精霊の民と名付けましたが、これは言い過ぎではありません。聖書は恐ろしい書物です。でも、それは〈書物〉です。初めには何もありませんが、人が思考する如く精霊が創られます。その最初は光です。そして光から分割されたように精霊が残されます。崇高は、ロンギヌス(1)が言うように、最初の閃きにあります。人間はそこから戻ることが出来ません。人間は粉々にされて小さいものです。あらゆる人間の思想は、もしもそのものが賞讃され歌われるだけであるなら、粉碎されて小さいものです。こう言って良ければ、精霊は形而上学的次元で立ち上がります。全ては神意です。全ては前兆です。確かに全ての儀式も、全ての犠牲も、嘗て行われたように今も行われています。しかし崇高というものには、無能と不足が刻印されています。偶像崇拜は誤りであることを自ら知ります。聖歌だけが、思想の犠牲により神の御心を得るのです。虚偽の神々は犠牲にされます。隠喩も犠牲にされます。至る所に現前する砂漠の空虚と、恐るべき不在が取り残されます。これの前では服従以外に美德はありません。全ての誤りは皆等しいのです。唯一の罪は、人間が〈永遠〉の前で何ものでもないことを忘れることです。この見方は、人間が理解出来ない一種の許しと厳格さを説明していますが、真実を鳴らしています。というのも全ての価値は精霊のものであるからです。有限の精霊というものは不十分ですから、人が自己を認識する偉大さそのものによって屈服しなければなりません。自分の信仰心そのものによって非難された人間は、真の神に無知であるのは大きな罪であることを確かに理解します。しかし、更にもっと理解します。〈神〉の民に属することは、更にもっと大きな罪であることを理解します。というのも人には出来ないことであるからです。それは自己の後に聖書を引っ掛けて引き摺って行くことであるのを人は認識します。そしてこの人間への侮辱と自己への侮辱、しかし何ものでもないというこの誇り、そしてヨブの本質的なアイロニーは感謝に値するものでなかったのを知りますが、それは当然なことです。常に誤りのうちにあるこの精霊は、誤りにはある意味で無関心ですし、希望もありません。以上のことから、労働も快樂も苦悩も、暇つぶしとしては同じ力を持っています。ユダヤ人は嘆き悲しむように働きます。そして企図の無いこの種の注意力は、支配しようとする野心的企てよりも屢々一層有効です。

全ての宗教は一体となっています。何故なら人間の全ての部分は一体になっているからです。「天国では神の栄光を語る」。従って自然は勝手であり、不可解な作品として低く見られます。しかし又同時に、自然は再び高められもします。というのも、全てが神の象徴であるという意味においては、全てが神のものであるからです。全ての事物が隠喩の地位に高められ、かくして外部の美とその反映する美を纏うこととなります。従って宗教は動作の中に全てがあり、如何なる魔術も無いのが全てが魔術的です。戦いの長が両腕を上げる度毎に、兵士たちは勝ち誇ります。そして両腕を降ろす時、兵士たちも敗者になります。ところで彼は疲れます。しかし、もっと若い二人が空中で両腕を支えると、ついに勝利を手にし(2)。以上は、「物言わぬ物語」とモンテーニュが語るものの一つの例でもあります。この動作は創造を模倣します。行動まで動作を押し進めるのは、偶像崇拝者たちです。行うのは狂気であり、意味を与えるのは偉大さです。ここに見出すのは、信仰心と同じ過剰さによって、極めて注意深く保存されている唯物論の一端

です。思考することは、意味するものが無ければ何ものでもありません。しかし、これは十分言っているではありません。内面の思考は神から遠くて、余りに悲惨過ぎて、表現される価値は少しもありません。寧ろ星々が行うように〈神〉の思考を表現しなければならないでしょう。確かに余り十分ではありません。というのも人間は卑小であるからです。しかし、少なくともこの偉大な劇場と調和して行わなければならないでしょう。かくして誇張された卑下と思考の動きによるのではなく、自然の動きによる一種の舞踊が全く自然に生まれます。田園のものとは、名状し難い偉大さや一体化を表現するための一種の絶望ではありませんでした。以上により、悲劇作家は全く外的であり、虚しいイメージに彼自身を犠牲にします。良く知られた演劇的な能力と、形而上学的虚栄心という特徴を身に付けます。『伝道の書』は、この役者の最後の言葉を語りました。それ故に自己の模倣は祈りでしかありません。憤怒や絶望や呪いは、それら自身のイメージで屈服し、痙攣を感じるという罪を罰します。そこから齎すのは痙攣が気高いということです。それ故にあらゆるイメージは、それと反対のものを表現するようになります。そして、その様なものは直喩が発展しないで、瞬時に自己を否定する隠喩の精神になります。従って自然の聖書的感情を、純粹に田園的感情と決して混同してはなりませんし、イスラエルの預言者をデルフォイの巫女と混同してもなりません。汎神論的時代の想像力は、自然の背後にも又自然を求め、痙攣そのものの中にも大きな秘密を求めます。これに反してイスラエルの想像力は、〈永遠〉の前で、自らが不純で呪われていることを知ります。その様なものが純粹な〈神霊〉の支配下における、自然から神への移動となります。

二つ目の段階の宗教は政治であり、決して隠喩を通過しませんでした。そして一種の激怒の中で、純粹な神霊に委ねた力の属性は、精神の宗教の恥の部分として受け取らなければならないように私には思えます。私はこの主要な誤りを、最も高度な宗教が絶えず自らを解放するために行ったのと同じ努力の中で探究したいと思います。ここに灯台のように現れるのは、恩寵の教義と、不面目にも体刑を加えられた人と、クローデルの叫ぶ者のイメージです。その様なものが、それが存在する方法なのです。その神意による神霊は事物よりも悪質です。というのも事物に反対する事物、暴君に反対する暴君が常にあるからです。しかし神霊は一つのものであり、頼りになるものも救いになるものもありません。神学は、その〈完全者〉だけが独り靈感を与える限り、首尾一貫して完全に取り残されています。というのも、神は変わることが出来ないからです。肉体という暴君は執拗であり、そしてこれは宮廷人や近衛兵や全ての人々にとっても熱愛される情熱の一つのイメージとしてお気に入りになります。でも、純粹な神霊は執拗ではなく、只あるだけです。世界にあるのは、それらの神意だけです。従って全ては事前に正しいのです。疑念は罪ですが、祈りによって事は終わります。「私たちではなく、主よ、私たちではなく、あなたの御名こそ、栄え輝きますように」(3)。御心の成されんことを、若き御心の...(4)。

この神霊の見方は、決して精神を殺しませんでした。知性にとっての最初の学校は必要性であり、それは被るのではなくて不可避免的に抱くことであり、その様にして必要性は神の限りない理解力の中にあるようになるのです。まさに絶対的と言われるその様な必要性は、私たちの把握を超えたものであることも余分ですが知られていますし、それには異論がありません。しかし、数学のように私たちの精神上の連続や整然と与えられた組合せは、一種の思考する神のイメージです。反省としての聖書への回帰は、既に私たち自身と共に前提になっている慣例をアイロニ

一として示すことになるでしょう。しかしながら、信じることなく組み合わせるためのこの行使は、人がそれを軽視しさえすれば、継続して行くことが許される一種の知性です。神の命令でもあるこれらの事業によって、更にその働きが養成される聖書的精神は、その他のもっと一層、田舎的諸思想に基づいて驚くべき前進を保ちます。それらの思想は更に公正である気を起こしますし、神を侵害する気も起こしています。理解力はユダヤ的であり、芝居じみた素質を抽象的に展開しますが、それは理性を表面的に演じながら、市のようなもののために町にやって来た農民たちが仰天しているようなものです。もしも、ここに批判めいたものが何かあるとするなら、〈永遠〉の糸を何本も結び直しているけれども、思考する巨匠として、最も厳格で厳正であり自由な人間の規範でもあるスピノザの前では、それを取り消さなければなりません。この公平さは哲学に表現され、そして恐らく数々の哲学に表現され、物言わぬ歴史である宗教に戻らなければなりません。（完）

（1）ロンギヌス（二一三頃～二七三）は、ギリシアの哲学者・修辞学者であるが、『崇高論』は疑わしい著作とされている。

（2）旧約聖書「出エジプト記」第十七章。アマレクとの戦いにおいてアロンとフルがモーデの腕を支えて勝利した。

（3）クローデル（一八六八～一九五五）の劇「人質」（一九〇九）より。

（4）旧約聖書「詩篇」第一一五。

### 第三章 隠喩について

隠喩は、精神の宗教には本質的なものであり、このことによって全段階の宗教が統一されるので、その外観と並んで色々なイメージを保持しているかどうかでしか精神の尊厳は救われません。その様なものが表徴の意味であり、その意味には実際に予言的なものがあります。というのも、それらの表徴はもう一つの秩序や降誕を絶えず告知しているからです。しかし、もっと人間的に理解するなら、数々の隠喩には人間の全てを感動させたり、真実の道に人間の肉体を導いて行く力も又あります。もしも魂と肉体のこの結合が少しでも理解されるなら、詩には最初の思考が至る所にあったことや今でもあることを理解して、びっくりすることもないでしょう。それというのも、上手い理屈を言おうとする野心によって、実際の諸条件は何時も失念されるからです。舞踊や音楽は言葉で語る危険な芸術に従属しながら、人間を常に自分自身に立ち帰らせてくれます。ヴァレリーの詩集『若きパルク』は今でも心理学にとっての最良の序言です。しかし、私はもっと田舎風で素朴で力強い例を用います。というのも『若きパルク』が、少しも強制しないのは余りに良く知られているからです。

聖書の中で、人は木々たちが木々たちの王を探しに行く話を読みます(1)。木々たちはあらゆる善良な木々に、つまり林檎の木やプラムの木やオリーブの木に王位を申し出ました。全ての木々が同じ答えでした、「何故私が木々たちの王になるのでしょうか」。最後に茨の処に来ると答えて言いました、「木々たちを支配するのを私は良く望むが、あなた方には気を付けよ」。この話は完全に信じ難いことに直ぐに気付きますし、人はそれに気に入りもします。というのも別のことも人は期待しているからです。それは、実を言えば寓話でしかありません。しかし、雲のようにそこからは電撃的な聖書の精神が出て来ます。少なくともこの雷に打たれた私たちは一瞬、茫然自失した儘でいます。それというのも私たちは、茨のように荒々しくて刺すような真理を両手で掴むからです。そして先ずはそれを拒むことで全てを理解しなければなりません。これは敢えて理解力と分離しないことであり、そこに到達するには決して急ぎませんし、そこに到達するには数々の証明に疲れても、更に何ものかを無視したという快い疑念によって慰められます。理解力は精神よりも厳しくありません。ところでこの最後の審判者である精神は、数々の理性の働きで私たちを疲れさせることがなく、少なくとも私たちに見詰めることを強制します。というのも、何故賢者は支配するのを望むのでしょうか。いいえ、違います。少なくともそんな必要はありませんし、その上更にそんなことをする術も知りません。あるいはもっと適切に言うなら、賢者が支配したいと思ひ、支配する術を知るとしても、それは英知によるものではありません。反対にそれは権力を望み、支配する術を知るのは、常に悪意ある部分なのです。この思想は単に陳述し発表するだけで暴君たちを貫き、神にまで遡ります。しかし急がないことです。問題は木々たちです。そしてそれは真実ではありません。かくして真実の中の真実は無垢の足跡を残し、耐え難いまでの思想を辿るのを可能にしています。その様なものが積極的な懷疑です。その様なものが精神の美しい出発です。というのも精神は真理そのものに対して安心させられている必要があるからです。デカルト的なこの術策は深く秘められています。如何にして隠喩が思考するための環境と空間を与えているのかを人は理解します。



有名なラ・フォンテーヌの寓話である「鳥と狐」も又、解釈に適しません。動物たちは時々、人間たちが行うように話したかどうかを、人は決して問いません。チーズが鳥の嘴に銜えられるかどうかも問いません。これらは幼稚さとも異なります。別のものが求められているのです。それでは何を発見するのでしょうか。全く機械的な数々の情熱の描写であり、情熱の下部を冷静に通して理解するものです。英国の作家スターンは語っていますが、ある晩退屈だったので醜い女性と将軍と詩人の三人に、大仰で無用人なお世辞を言ったらどうなるか、を単に見るためにその様に言ってみたとのことです。スターンは、私はその晩に決して無視出来ない友人が三人出来た、と言っています。私たちはこの話を笑いますが、決して本当のことと信じません。阿諛の効果が、思想によって十分に理解されることはないでしょう。もしも私たちが大変綺麗に着飾ったこれらの虚栄心を持った人々に鳥の嘴を見ることが出来たなら、私たちはチーズが落ちるのも見たことでしょう。狐は嘴を見て、問題はそれを開けることだと思います。狐は歌のことを話して、歌を呼び起こします。嘴は開き、チーズは重力によって落ちます。鳥は少し後になって考えますが、少し遅すぎました。かくして数々の情念が、デカルトが望んだように私たちの前に描かれます。そして実際に動物機械は、人間にとっての鍵の一つになります。あらゆる交渉事における成功は、常に人が信じられない程の最も単純な原因によっていました。良い車とか、良い座席とか、礼儀正しさとか、緩められている拳固とかが原因なのです。お茶を持つ者は、拳を握ることが出来ません。この時の思想は又、別のものになります。この観念は乱暴であると私も認めますし、殆ど信じられません。それ故に、姿形と動きに全てが依存されている動物的シニスムは、私たちが疑念の中にいない限り、色々な証明よりも良く私たちに啓発してくれます。何故なら物語は、真実として与えられていないからです。抽象的思想が諸情念に結び付いているか、あるいは諸情念と異なっているのか、ということに少しも応えていないのを人は余り気付いていませんでした。もしも幾何学者が、虚栄心は幾何学によって妨げられているのに気付いたなら、彼は数々の証明をもの見事に投げ出す、とライブニッツは言いました。ライブニッツは実際に一例を見たのです。

私が単純に、そして故意に選択したその他のこれらの例は、神秘的な啓示という大問題の傍に私たちを連れて行き、そしてそこへ投げ入れます。というのも私たちは信じられない位に豊富な真実の観念を持っているからです。それらの観念は私たちの肉体を捉えませんし、触れることもありません。しかし対象でも状況でも、私たちが知覚し否定することを考えもしない何かの機会が訪れると、その時は私たちが十分に承知した観念で自分を貫くことが出来ますし、それは私たちには無害なものでした。常に望まれることのない幾つもの偽りは、敏感で無防備な一点から私たちの裡に這入って来ます。かくして事件や事例やイメージが話を面白くします。そしてその中に色彩や音調や堅固さが与えられて、私たちの全存在によって受け入れたり排除したり、あるいは唯一の理解力によって先延ばしにしたりしたものを結局は確保するようになります。又、かくしてまさに現実の恐怖が森や谷間の神、つまりぼんやりとしているが力強い観念を現出させるようになり、私たちは自分のやり方でそれを調整しなければなりません。というのも私たちの行為は、先に進んで行くからです。それは最早、単純に観念を持つだけのことではなく、その観念を創り上げている最中であり、打ち克つのが義務になっているのです。かくして驚異とか美とか崇高とかの衝撃によって、想像力が私たちを捉えて仕舞います。そして茨までも全てを救済しな

ければならないこの思想は、まさしく宗教のものです。待つこともなく私たちの喉元を捉えて仕舞うこれらの悲劇的問題から離れて、私たちは容易に気楽に、そして何でも構わずに思考することを認めなければなりません。それ故に、あらゆる宗教が啓示されるのです。（完）

（1）旧約聖書「士師記」第九章。

## 第四章 無花果の木

恐らく四千巻も占める近代の誤見は、何時、何処で、宗教が啓示されたかどうかを探究することであり、そして私たちは何らかの証拠によってそれを知ります。間接的な信仰によって、そして不信心そのものによっても啓示された観念は、それが如何なる状況で啓示されて現実のものになったかが証明されて、人々がそれらを正確に語る限り以外には真実にならないように見えます。だが、その証明は与えられません。何故なら、存在のための全ての証明は、経験としての証明であるからで、過去についての経験は少しも無いからです。しかし、もっと良く言うべきことがあります。あの木々たちが嘗て、王を求めたかどうかは誰も問いません。あの狐が烏に語ったかどうかも誰も問いません。この物語によって生命を取り戻した観念を、新たに理解することが重要です。もしも物語が私たちに教えるとするなら、一つの物語がその存在になり得るのと同じように真実になります。ホメロスが実在したことを私が知ろうと知るまいと、それで『イリアス』の美を変えることはありませんし、神々や自己を認識するために人間がそこから引き出すことが出来るものを変えることもありません。イエスはパルサイ人と呼びました。私はそこに自分を認めます。そこで自分を裁きます。この言い方は私の裡に結び付き、一本の矢のように突き刺さります。私が先ず検討しながら私を窮地から救い出したいと願うのは、イエスが存在しなかったならイエスが言ったことはまさしく真実でなくなると私に言いながら、イエスが実際にそれを言ったかどうかです。これは結論を引き延ばすための一つの試みです。又これは恐らく、毒にも薬にもならない宗教にして仕舞うのを目的としている気晴らしであり、私が言うのはそれを実行している人々に対してです。というのも人は証拠を殆ど信じません。この種の批判をする精神が面白いのです。というのも人は証拠を殆ど信じませんし、この種の批判をする精神が面白いのです。しかしながら、偽善者とは何ものかであり、パリサイ人の偽善的行為も同じです。重要なのはそれが真実であるかどうかを知ることではなくて、如何にして真実であるのかを知ることです。そして、人が軍事力やお金では王の権力を手に入れることが出来ないと同時に魂も救えないと、もしもイエスが教えたなら、吟味することとはイエスが或る日それを言ったかどうかではなくて、イエスが真実を言ったかどうかです。信じなければならず、信じることから始めなければならず、先ずそこに身を置き、常にそこに戻らなければならないことは極めて真実です。「知性は信仰に従わなければならず、決して信仰に先行してはならないし、砕いてもならない」という『キリストのまねび』(1)の箴言を、コントは屢々考察しました。読者は多分、驚いたりせずに既に理解する準備が整っていると思いますが、この箴言はかなり知られている寓話である〈無花果の木〉の例をより一層明白にするでしょう。

イエスは喉が渇いていました。そして、一本の無花果の木をふと見ます。イエスはそこに無花果の実を一つも見付けません。無花果の実が成る季節ではなかったのです。イエスは直ぐにそれを呪います。すると、その木は枯れて仕舞います。それは許せないことです。そして、私たちの聖書の注釈学者は、無花果の実の季節でなかった指摘の齎されるのが如何なる非常識な写本者や出来の悪い文書によるのかを、直ぐに見付けようとし、ところが何度も繰り返される一つの経験によって、私はテキストを理解しようと真剣に試みる前に、テキストを軽率に変えてはなら

ないことを学びました。というのも、この困難が私を刺激するからです。そして私を刺激するものによって、私は偉大で重要な観念を屢々引き出すに至り、それなくしては私の柔軟で抽象的な思想は無視したことでしょう。その点で私は信心深く、真の信仰心を持つ者であると強く主張します。私が不条理を受入れる誓いを立てることはありません。何故なら、私は外見上の不条理を乗り越えてみたいからです。もしも私が先ずこれを修正したなら、不可能になるのは明らかであるからです。この方法は、この場合には都合が良いものでした。というのも、もしも無花果の実が成る季節でなかったなら、重要なのは無花果の木でもなく、私自身であり、私の仲間である人間たちであると私は独りで考えたからです。直ちに無花果人間たちを探す私がここにおりますが、遠くを探す必要はありません。昔のことではありませんが、戦争の話をしながら或る人間が言いました。その時は無花果の実の季節ではありませんでした。つまり正義と真理の季節ではありませんでしたが、今はその季節が来たということです。又、他の人々はもっと単純に、役所は閉まったので、不運な人は出直さなければならないと言いました。あるいはもっと適切に言うなら、予算は無くなって仕舞ったと言いました。こうしたことに全て答えることは何もありません。というのも、ここに支配しているのは外的条件であり、良く考えてみるなら正義に対して常に必然性を引き合いに出したり、これからも出すのは権力による秩序であり、シーザーの秩序であるからです。私は今は出来ませんし、時間がありません。状況が、私やあなたよりも強いのです。無花果の実の季節、つまり太陽と水を待ちましょう。無垢な無花果の木が行うことが出来たように、人間たちも弁解します。そして、呪いの一撃が私を貫きます。預り物を返すのを延ばすのは、何時も色々な状況によるのではないのでしょうか。そして不幸なジャン・ヴァルジャンがシャンマティウの身代わりになってアラスへ自首しに行く必要が少しもないのを、自分自身で証明しようとするのも状況によるのです。しかし、あなた方はそれ故に外部から全てを受け、単になす術を知ることによって状況を返すだけの無花果の木であるのだろうか、と神は言います。あるいは、あなた方は少なくとも自分たちの貯えを、彼らが言うには分配する術を知っていて、自由に分配したいと思う人間なのではないでしょうか。偉大な総督ピラトは、それを断念します。彼の精神は、無花果の木のように手を引きます。彼はきっぱりと絶対的に断念するのでしょうか。私には分かりません。しかし主要で恐らく唯一の間違いが、人間としての条件を放棄することであるのを強く喚起した人を、私は主なる神と呼びます。この神は要求するものも多いです。ジャン・ヴァルジャンはこの神の声を聞き、同意しますが、この正しい神が他の人間の前とか後で生きたかどうか、あるいは只単に嘗て生きたかどうかを問うことはありません。というのも期日通りに、何らかの勅令とかシーザーの王令に従って万事を行いながら、行政の無花果として皆が恙無く生きれるとか、もしイエスがいなかったならそれだけで十分に快適だろうと自分で言うことは面白いからです。しかしイエスが言ったことは撤回されませんし、一度表したものは撤回出来ません。

この観念を繰り返し検討しながら私が気付くのは、ジュピターが今後は他の力にとって代えられるということです。それは単に力でなく、単に力を拒むのでなく、全ての力を審判するものであり、シーザーに僅かなものを返しながらか、貯えさえも審判するものですが、最も高い価値を拒むものです。そして実際に政治的力であろうと、もしもお望みなら軍隊の力であっても、価値としては自然の力に勝ることは現実にはありません。というのも問題なのは、一つの力が力である

かどうかを知ることであるからです。ところでルソーは、泥棒のピストルも一つの力である、と上手いことを言いました。人はそれも敬う必要があるのでしょうか。絶対に革命的なこの『社会契約論』の思想は人を驚かせますが、啓発することはありません。ルソー自身が外的必然性に余り同意していなかったらしいというのは、確かではありません。というのも結局この必然性は、公然とあるいは良く承知の上で、嘘をついたり、罪の無い人を殺したり、労働に少しも賃金を支払わないのが、良いことにはならないからです。これは議論されますが、人はそこに最早何も見ません。私は孤独の裡で、シーザーや武器のように取り扱われて、そして刻一刻と戦場にまで私や私の思想が流されるこの必然性から、遠く離れているあの無花果の木の方をもっと愛しています。ジャン・ヴァルジャンの裡では良心の命令がそんなやり方を強制しない、とまさに私は確信しています。というのも独りだけで助言もなく、自分だけで思考することから免れたりしないで、反対に良心はそれを彼に命じるのです。まるで『人質』の司祭が不幸な女性シーニュに言うように、強制しないで命じるのです。「あなたに義務があるかどうか知ること、それはあなたがすることです。あなた独りがすることです。そして神ご自身は、あなたにこれの犠牲を求めたりしません。神は単に待つだけです。しかし、あなたが少しも義務と考えないとしても、私は神の御名において、あなたの罪を許します」。この様にしてキリスト教革命における自由思想の純粋な全ての観念が姿を現しますが、それは屢々その出自を無視して、更にその上今でも全てを測り終えていないのです。しかし私はもう一度敢えて言いますが、全ての宗教は一体となっているので、キリスト教も権力からすっかりと自らを洗っているのでは決してないのです。それを望んで来たり今でも望んでいるのは、神学によれば曖昧ですが、イマージュによれば明瞭であり、殆ど盲目的に明瞭です。四本道の十字架を長い時間考えて下さい。これは私が祈りと呼んでいるものです。そしてその上で簡単に言うなら、宗教が偶像崇拜的であるなら極めて重大である、と私は言います。純粋な観念として、それは最早宗教ではありませんし、大したものでもないのです。(完)

(1) 『キリストのまねび』は、ドイツの神秘主義者トマス・ア・ケンペス(一三七九又は一三八〇～一四七一)の作品と言われているラテン語で書かれた十五世紀におけるキリスト教徒の手引書である。劇詩人コルネイユ(一六〇六～八四)や司祭ラムネー(一七八二～一八五四)によって翻訳された。

ギリシア神話のサテュロスは、何時も木の背後で、まさに姿を現そうとしています。絶えず木の根元が雌鹿の姿をして、私たちを見詰めていることはあり得ます。あらゆるものが私たちの動きによって逃げ出し、姿を現し、隠れます。物音が弾み、罅が私たちに答えます。川に架かる橋のように、平原の上に虹が出ています。都市の弓である軍隊の門は、もっとどっしりとしていて頑丈です。その門には触れることが出来ます。人はそこを通りたいと思います。そのアーチ型天井の下の通風が私たちを動かします。権力は美しく、競技者も美しく、シーザーも美しいです。シーザーのために死ぬのが美しいのです。間違った栄光は私たちを誘惑しますが、真実はもっと良いものです。虚栄心から先ず欺かれた私たちは、抵抗する者を直ぐに死なせることを真の権力の中で知ります。私たちは現実によって身を滅ぼします。現実は、私たちを夢から抜け出すための隙を窺っています。それなのに存在するものを斟酌する人に、如何なる非難が出来るのでしょうか。先ずは生きなければなりません。私は可能なことを行う人間です。支配することは些細な仕事ではありません。支配されることも些細な仕事ではありません。生活費を稼ぐことも些細な仕事ではありません。そしてプルドン(1)は言いました、「職に就いている人間の思想とは、彼の俸給のことである」。ここに軽蔑すべき愚者がいますが、君主のお気に入りです。私には極めて明白に正しい最終的要求は、彼次第です。会計係も株式仲買人も同様に、尊重しなければなりません。私は危ない状況にいます。少しは善を行うためには、悪にも留意しなければなりません。全てが私の袖を引っ張ります。あゝ、悪魔よ、悪魔よ。

この間投詞は、最も正確な音楽と同様に、耳には雄弁に聞こえます。あゝ、悪魔よ。私はあるが儘の如く、そして行って仕舞うが如くの事物を忘れていました。あゝ、悪魔よ。私の手帳には、殆ど何でも構わず延期させられない数々のことで一杯です。悪魔という言葉が言っているのは、直接的でない力です。それは眼の前を横切る野兎であり、もっと適切に言うなら、横切る君主の姿です。悪魔とは伏兵です。精神に戻るのに必要なものです。メフィストフェレスは極めて賢明です。彼は全てのことを思考します。何と掛け替えのない大臣を演じていることでしょう。

『ファウスト』には驚嘆の連続があります。それらの観念は果実のように熟しています。長い縮れ毛のバーベット犬から金融業者までの生命線を辿って下さい。何時も同じ悪魔がおります。当初は幻想的です。しかし歳を取れば取る程、誤論の余地の無いものに似て来ます。人間の姿をしたバーベット犬に従わなければなりません。「物事の流れはこんな風にして動く」。鶏が鳴く前には、三度も動きます...

千の姿をした悪魔は、最も高級な宗教から生まれました。悪魔はこの宗教に影のようについて行きます。それというのも、私たちの腹部に占める植物や動物の全ての神々を、どうすれば良いのでしょうか。又、私たちの腹部を占める冠を戴いた全ての神々を、どうすれば良いのでしょうか。神々は皆現実的で嘘つきです。神々とは外見であり、真の外見です。最悪なのは、最良を占めているものです。というのも王になるからです。悪魔はイエスを山上へ連れて行き、谷や森や大地や都市の力を示しますが、それらはそれらを望む者のものなのです。それは常に、金色の帽子と負い皮を付けた雄山羊になるしかありません。それは全てが誘惑です。そして悪徳は報わ



れることを決して忘れません。あゝ、不幸な人間どもよ、と既にプラトンは言いました。彼らは間違っただけの選択をしようとしています。全てが彼らを欺きます。自分の友人たちの役に立つために、誰が力のある者になりたくないでしょうか。この声は殆ど理解されませんでした。私たちに警告しているのは私たち自身の存在であり、私たちが投げ込まれようとしている奴隷の身分です。悪魔のこの雄山羊は、言葉巧みに私たちに話します。それは変装していたり、突然に出現したり、奇跡によったり、閃光のように行き、手に取り、変形し、与え、支配するのを私たちに与える容易さによります。子供は何よりも先ず、きちんと礼儀正しく話すことで、手に入らないものは何も無いことを学びます。正義や労働の道は、これとは反対に長いです。悪魔よ、悪魔よ。

真実といっても決して真実ではなく、虚偽といっても全く虚偽ではない、これらの真実と虚偽の悪魔的混淆は、全ての低次の神々や自然の神々や政治的神々が集められた完璧な観念を私は認めました。神々が存在しているのは明白なことです。神々は存在する以外になく、存在そのものです。そこから私たちは考察するのであり、繰り返し考察します。単なる存在は決して神ではありません。氷河よりも強いものは何でしょうか。氷河は岩山を押し潰します。谷を削り、急流や河を創ります。田舎や都会を流れます。盲目の力です。征服する力です。シーザーも又盲目です。彼は偶然の傾斜に従って引き抜き、取り壊し、方向を変えます。勝利も敗北も、世界の屋根を描くだけのことです。一つの帝国は河のようなものです。砂は河よりも強いです。風は砂よりも強いです。それ故にイエスは言いました、「私の帝国はこの世界のものではない」。悪魔は譬え如何なる言葉が無くても、彼の帝国はこの世界のものであると、もっと正確に言います。しかし数々の伝説や芸術や言葉にさえも、何と見事に一致していることでしょうか。悪魔というこの一言だけで、全ての神々が何と見事に平均化されて仕舞うことでしょうか。悪魔が永遠に地獄に落とされて仕舞っているのは、色々な意味に溢れています。というのも宇宙は何時もあり、何時も価値というものは無いからです。精神が自分自身を先ず信じないなら、少なくとも自分自身を信じないなら、欺かれて仕舞います。

デカルトは、悪魔を〈省察〉の段階へ高めるのを気にしませんでした。デカルトは、それを〈悪しき霊〉と命名し、明証により、そして真実によっても欺く力をそれに認めました。それは外的な神を断固として否定することでした。そして、そこから出て来たのは、又常に出てこなければならないのは、誇張された懐疑の瞬間です。何故なら、ここは間違えてはなりません、デカルトは不確実なものを疑うことから、確実なものを疑うまでに高めたからです。この懐疑はその儘残っています。今後は姿を現す全てのものが結び付けられます。というのも、懐疑は真理においては決して姿を現さないからです。そして、その精神は少なくとも精神自身と観念と名付けられて決して存在しない事物で、武装させられているものです。それは虹や雪や磁石や、私たちの眼の中でしか光らず、私たちの肌の下でしか暖かくなならない太陽の威光を解明するようになる精神です。この名高い素晴らしい革命は、哲学のものであります。しかしその革命は類推によって、キリスト教的革命とその際立ったイメージを明らかにしています。というのも精神への敬意が価値あるものを与え、低次のものをしかるべき処に戻すのは本当であるからです。しかしながら低次のものが只の一瞬も、そのしかるべき処に止まらず、全ての残り部分を動物的法則に絶えず降ろしたがっているのも本当です。全ては誘惑であり、全ての外見が悪魔によれば間違っていて、精神によれば真実であると言うのは極めて正確です。間違いは何ものでもありません。しかし、そ

れは姿を現します。その様なものが悪魔の正体であり、非難しようがありません。

それらの結論にはびっくりするでしょう。何故なら精神の宗教という本来の意味は、奇跡を拒絶することにあるからです。でも、宗教は決して全ての奇跡を否定するものではありません。全ての宗教は人間の中で一体となっていて、それがもう一度意味しているのは、諸宗教が人間の時期的なものではなくて人間の段階的なものであることを、私は繰り返し言いたいのです。素晴らしいに違いないのは、田園の魔法が混じって都市の力で汚れているけれども、しかしながら精神の宗教が先ず全ての奇跡を否定する使命を持っていることです。それは常に、一つの奇跡の外見を与えることが出来る悪魔の大きなイメージによるのです。私たちが見る段階での数々の神託を永遠に制限しながら、そして全てが奇跡だった古代世界を一時的にも否定しながら、もしもキリスト教が超克したり断罪したりする混濁した諸宗教を人が考えなかったなら、限定されているにしてもキリスト教は正しく評価されません。それが良く示していて忘れることが出来ないことは、精神は奇跡を裁くものであるということです。結局のところ精神は、それ自身の裡で奇跡を強固にしたり、あらゆる威光に対して堅固な決断を与えたりするものを奇跡から引き出すことは決して出来ないということです。神学的にも言うように至らなければならないのは、真の奇跡は私たちの精神が混濁し盲目となった時にのみ例外的なものとなります。反対に、もしも私たちが全てを知ったなら、精神の法則を確認します。かくして永遠のデカルトは、〈悪しき霊〉と戦いますし、何時も誤謬に脅かされますが、こう言って良ければ誤謬によって確信することさえあるのです。しかし、精神は前もって誤謬を呪い、もう一つの人生に逃げ込みながら、精神そのものを安心させます。世界の喧騒に私たちを連れて行くものは、悪魔や、その幻を消散させる十字架というこれらの偉大なイメージです。何故なら十字架上の〈正義の人〉は、私が思うにこのことを十分語っていますし、必然性と諸権力についてもそれ以上に十分語っているからです。そして、この恥辱の徽章に最高の価値が与えられると、悪魔は最早その四本の足で転落するしかないのです。（完）

(1) プルードン（一八〇九～六五）は、社会主義者でアナーキズムの創始者。

## 第六章 聖者

ギリシア的美には、さよならを言わなければなりません。というのも、それは強者でいることの幸せでしかないからです。自然と都市が共に所定の場所に限定されると、他の栄光によって祝福された数々の寺院や英雄が立ち上がるのを人は見ました。そしてヘーゲルが指摘したように、ここでは芸術が講演よりももっと雄弁に語ります。何故ならこの新しい寺院は、都市の中央にあっても閉ざされているからです。又、新しい競技者も近づき難く、隠されているからです。この時、人間の形をした彫刻は、彫刻そのものを拒否して否定することしか出来ませんが、外部に対する軽蔑を告げ、内部に対する美しさを間接的に告げています。絵画は最も良く武装されます。これには理由が無い訳ではなく、ヘーゲルはそれを本質的にキリスト教的であると言っています。絵画が世俗的であり得ないと言うものではありません。しかしながら世俗的であっても絵画は、光を反射するもの全てに拡散するのと同じ美を望むなら、それを与えながら外観も更に均一にして仕舞いますし、何よりも顔や取分け眼の表現によって、内部に逃げて行ったものを把握して、恰も奪い返すが如くすることが出来ます。そこから私たちは魂の価値と、限らない主観性の真価を十分に読み取る術を知ります。これの後者の言い方をより一層適切に言えるとするなら、私はヘーゲルによって理解します。肉体の中に閉じ込められて全世界よりも大きな精神、自我でしかなくそれが全ての精神は、もっと適切に言うなら、音楽や詩の中に姿を現しているのであり、それらは精神の最高の芸術です。精神の宗教は、説話よりもそれらのイマージュによって不純からより良く救済してくれるという観念において、一連のこの偉大な一致した表徴が私たちに確信を生みます。私たちが何よりも高く評価するものは、消し去ることが出来ません。私たちの至高の喜びは、譬え悪魔がそこにいる時でさえも、私たちの崇高な部分をすっかり忘れるのを思い止まらせます。

この種の礼儀正しさによっても、私たちは未だ神聖から程遠いのです。人間は、喜びの中にしろ怒りの中にしろ、動物であることを決して自慢しません。両者の間の関係にさえも気付きながら、喜びや怒りの行き過ぎに用心する賢者たちが何時もいましたし、制度上も残酷になる権力が飲み騒ぐような狂愚へ自然に行くのも用心しました。ソクラテスはその点に関して言い尽くしました。マルクス・アウレリウス皇帝(1)と奴隷エピクテトス(2)は、支配する連中の名誉を傷付けないための配慮を極端に押し進めました。彼らは服装や富や権力を引き離して、人間の偉大さについての正しい観念を持ちます。その観念を探究して、数々の外見の下で敬意を示しますが、それは平等と博愛さえも予感させます。けれども彼らは異教徒です。パスカルは彼らを傲慢と断じました。彼らは自らを世界の子と言ひ、そして認識しています。その後ジャン・クリストフがやった様に、支配者たちのうちで最強の者を探しながら、彼らは広められて行くこの偉大さに立ち止まり、屈服させられます。「あなたの四季が私に齎すものは、全てが私のための一つの果実である。おゝ、自然よ」。お分かりのように、この回り道を通して、彼らはジュピターやその他のオリンポスの神々に満足したのです。それらの神々は、偉大な力でそれらの理性に詩的に与えられた名でしかなかったのです。そして彼らが、普遍的理性に向かって思想の中を歩いて行ったのは、まさしくその力によるのです。「世界よりも力強いものは何も無い。最早、大きなも

のも何も無いし、美しいものも何も無い。それ故に世界は理性である」。これは力を放棄することでは十分ではありませんでした。というのも、最高の力を未だ崇拜することであったからです。彼らは小さな人間を見ました。そこからある意味での、彼ら自身への蔑視と恐らく他の人々への素早い軽蔑が生まれました。彼らは世界の子であり、傲慢の子でもありました。多分、キリスト教のイマージュを理解しようとしながら、私たちは力が神の名誉さえ汚すものであるのを知るようになるでしょう。これと同じ観念によって人は、恐ろしい神の名を語るヘブライの預言者を理解しますが、ここには世界の次元が無く、精神に照らして何も無いのです。偉大で美しい光景と、絶対的な精神という二重の観念によるそれらの掟は私たちの手には負えず、ご存知のように、キリスト教の神学において再び見出されます。尤も、それは十分に鳴り響きません。決して主要にはなりません。それは崇高さについての誤解です。というのも崇高さは決して沈思された力の中に無く、沈思することの力、つまり現存する精神で内面の精神に復帰することにあるからです。いずれにせよ支配する秩序とか支配する精神という観念は、精神というものの概念を改悪します。というのも、どんなことも行われますし、言われるからです。救済は神から来るのであり、精神の価値は何も無いのです。

人はここに神の全ての恩寵の緻密さと、低くしたり高くしたりする慈愛の新しい秩序を見付けます。そこには自己と神しか持たない良心による沈思の中心があります。この逆説は人間の状況としての一つの与件です。というのも如何なる人の精神も、自ら感じる事が非常に弱くても、全ての数字を超えて数えたり、全ての限界を超えたりして行く力は、それでもなお持っているからです。そしてもっと適切に言うなら、思考する力から切り離せない誤るという力は、デカルトが見たように、又一人ひとりが感じるように、自由を含んでいます。自由は、如何なる機械的対象としての表象も、観念に戻し得ない意味においてまさしく超自然的なものです。これらの概念は、常に繰り返さなければならない骨の折れる仕事に、哲学を投げ入れます。良く言われて来たことですが、耐えながら曖昧さの無い一つの義務を前にした良心、又は最良なものを探求することにおいても良心から直ぐに考えることは、主要なそして恐らく唯一の間違いが人間の望むことなどに出来ないと言口に出して言うことです。これらの問題にあつては、それ自身が意志的なものであり、精神の力には外部の力によって、そして精神そのものにおいても脅かしがあります。永遠のシーザーと自由な良心の間で選択することが常に問題です。そしてシーザーの重圧が問題にならなくなるなら、自己とのこの極端な論争においては測定したり測定しないことは重要でなくなります。理解力はそこでは少しも役に立ちません。デカルトが語っているように、寛大に選択しなければなりません。又、使徒が言っているように、慈愛によって選択しなければなりません。しかし、そこに相違を見ないようにするためには、良く熟考しなければなりません。聖者は自己自身の正しい感情によって、そして幸せと共にこの道を歩みます。

私が、宗教は人間的で、非人間的ではないと言う時、そこでは全てを説明するのを約束するものでもありません。私が少なくとも言うことは、注意深く見詰めなければならないことです。そして、そこで見詰めれば見詰める程、思考する人間は先ずは驚くべきこれらの微妙過ぎる思考に至るに違いなかったのですが、思考する人間自身に誰が全てを明らかにしてくれるのかを、人は理解するのです。デカルトは、自分自身が自由であることが自由な神を崇めたのであったと、確かに考えました。無限の理解力という幻影によって再び捉えられないでいさえすれば、これらの

状況は詳説することが出来ます。かくも精神が自由で、神が精神であるなら、自由そのもの以外のものではない恩寵と救済が与えられます。更に恩寵に値しなければならず、恩寵でなければ決して恩寵に値しないと言うことは、最も豊かな言い方です。恐らく、最も美しい言葉で私たちは、自分が自由であることを主張することでもあります。しかし、その問題と同じ与件によって、この主張は何も保証していません。この主張は、人がそれを信じる以外に無限ではなくなります。そして、この信仰そのものは最高の信仰で、唯一無二の信仰です。この信仰そのものが自由なのです。自然は決して供給しません。自然は、人が一度定めた自由によって歩むことはありません。同様に前日の勇気が、翌日のために役立つこともありません。しかしながら、ある意味で見捨てられて救いの無いこの状況が救いの全てであり、唯一の救いでもあります。この種の自己の奪還は、私たちの思想で最も些細なものの中で継続されています。お前は独り逃げ出すが、この様なものが神の靈感です。それ故にパスカルは、信じられない以上にその中でデカルトに従い、精神そのものが無限に事物を超え、意志とか慈愛の秩序と命名する数々の精神を超える、一つの秩序を望んでいます。愛とは幸福なこの信頼であり、それ故にそれは最高の精神に止まりません。愛はその上を跳び、自らの概念を見出します。聖者は事物と精神の次の、この第三の天で私たちを待っています。（完）

（１）マルクス・アウレリウス皇帝（一二一～一八〇）は、古代ローマ皇帝の五賢帝の最後の一人で、『自省録』を書き、ストア哲学に傾倒した。

（２）エピクテトス（五〇頃～一三〇頃）は、古代ギリシアのストア派の哲学者で、ローマの奴隷だったが解放された。意志を鍛錬してアパテイア（無感動の境地）を保つことを説いた。

## 第七章 三位一体

私はお前を助けます。しかし、お前を助けるのはお前自身です。何故なら、自由は自由以外に愛することが出来ないからです。かくして権力は、身を引きました。その様にして古代の神の驚くべき消失があり、この神は不在によってのみ恐ろしいのです。これを信じるのは不敬虔です。イエス自身は天使による救いを拒否しました。キリスト教神学は全く素朴に父なる神、ユダヤの神、万軍の主である神を持ち続けました。しかしそれは、この神しか崇めないユダヤ人たちを、見放された人々と見做します。この種の権利の剥奪は、聖者たちにある独自の魂の偉大さというものを示しています。というのも聖者たちは、力を絶対的に否定しませんが、それを雲の中に放置し、秘密の教えとしては受け取らないからです。彼らはこの様にして父なる奇妙な権力を、全く自由なもの、常に尊敬に取り囲まれた儘でいるけれども、一瞬にして否定されなければならないものとして解釈します。外部の掟は内部の掟に席を譲らなければなりません。その様なものが最愛の子の未来です。かくしてこの隠喩は、言いたいことを大変良く語っています。聖者は、人間を侮辱された完全性として熟視します。聖者は、神と人間を唯一のイマージュだけで結び合わせます。聖者は、人間と神が自由な人間の中で、心の奥底から一体化していると考えます。聖者は、この自由な人間を十字架の上に見ます。聖者は、プラトンが『国家論』の中で、この偉大な光景を示したように考えます。この体刑が少なくとも証明しているのは、美德は力的手段ではないということです。王たちにとっての教訓です。しかしこの正義の人が、ヘーゲルの表現によれば、すっかり人間であるのと同時に、すっかり神であって大変に確かであることを如何に理解するのでしょうか。

神学上の微妙すぎる言葉はこの点について沢山あり、文字通りアカデミックなものです。しかしながら神の権化や魂の救済は、大変感動的な人間の活動を力強く表現しています。でも、純粹精神におけるこの種の秘密の計画や、高所からやって来るものの意志的なこの体刑を、私たちは実際の転落や救済に従って考えなければなりません。これらの描写は自然のものであり、意志と恩寵の制限を前提にしています。それは機械的に、あるいはもしもお望みなら理論的に、理解出来るだけです。というのも、それは全て同じであるからです。それは奇跡を決して受け入れない自然に、奇跡を新たに混入させるのを望むことです。罪の並外れた大きさのせいで、神が自らの子を犠牲にすることでしか人間たちを救済出来なかったとするなら、それは私たちの問題について如何なる現実の光明も無い代訴人の陰謀と悪賢さでしかありません。その点では私たちは全くの物質でしかなく、計算された群でしかありません。しかし神人から私たちは何を意味し、何を考えるのでしょうか。私たちは昔からの道や、私たちの全ての思想を生む実際の向上に立ち戻らなければなりません。神人同形説は、少しも未開人の誤謬ではありません。そしてギリシアのオリポスは、実際に私たちの古代の戦慄からの最初の救済です。ジュピターは人間ですが、蛇や雌牛や狼や猿や象と比較しないなら、未だ神になるまでに至っておりません。ジュピターは十分な神ではありません。完全な人間でもありません。というのもジュピターは少しも自己を超越していないからであり、決して自己を裁かないからです。彼はお人好しで、何時も異議の生じないシーザーのようなものです。未だ神であるに値しないのは、十分な人間でもないからです。ヤ

ハウエは全く反対で、最早全てが人間ではなく、ヤハウエの不可解なやり方は人間のものではなく、寧ろ森とか雲に隠れている筆舌に尽くせないものです。あの純粹精神が溶け込むことは最早出来ません。ヤハウエは人間から切り離されていますし、外部の奇跡となって人間の上に戻って来ます。これらの両者の横揺れからは、より一層近く真の人間に戻って来なければなりません。少なくとも真の無限への試行である何か崇高な錯乱を、もしも精神が守っただけでしかなかったなら、論理が具象化されるように宗教もそれ故に具象化されるのです。そして、人間としての精神的規範を認めて祝福したことは既に茨の王冠を戴いたのであり、些細なことではありません。それは単に私たちよりもより良く判断し、私たちよりもより良く愛するばかりでなく、私たちよりもより良く堪え忍ぶことなのです。この様なものは精神の二番目の契機です。それは二重の活動によります。つまり私たちを競技者から聖者へ高めますし、純粹の精神から博愛の精神へ連れ戻してくれます。最初は詩であり人間の意思表示であるこの弁証法が、更に熟考を糧として三番目の項である精神に私たちを投げ入れたことを驚嘆しなければなりません。その精神は私たちの救済の問題から曖昧なものを全て取り除いて仕舞います。この精神の〈復活〉の後には、聖霊降誕の主日とその燃える炎の舌があります。これによって精神は新たに私たちの要素に溶け込み、私たちの一人ひとりに委ねられます。この偉大な神話が完成するのは、裁判や異端や迫害の未来を忘れて軽視しないように、私たちが学校で学ぶことによってです。何故なら精神によれば全てのものにとって、考えられるのは一度だけというものは何も無いからです。反対に、全てのものは自由と愛の法則で、始めから、かつ始める前からやり直すことであるからです。しかし、それは信仰そのものによって懷疑するという恐ろしい義務を伴います。私たちはこの活動の中におります。だが、それを間違っただけで判断します。十字架捧持者たちは知っていることだけで満足します。それは最早、何も知らないということになって仕舞います。十字架を放擲した者たちは、体刑の条件を忘れ、シーザーのやり方で精神に支配させたいと思います。そしてこの二重の誤解は、精神を間違っただけで判断することから来るのです。その精神は決して存在せず、何も出来ず、思考したイメージの中で全てが消え、要するに絶え間ない不信仰によってしか生きません。私は聖者の中に見られる何も信じないこの性格を強調したかったのです。何故なら、数ある昔の宗教に照らして言うと、聖者は人々が信じるもので身に付ける儘にならない偉大な精神であるからです。それは富と約束を拒絶し、パンの神とシーザーを罵り、家庭や幸福や権力から離れ、更には自分の内部の富からも離れています。というのも聖者は高慢を裁いたからです。自分自身の救済さえも疑っているからです。これは聖者が慈愛と名付けたものであり、大変見事に名付けられました。というのも慈愛とは自分が信じさせられているものに反対して、常に直接的に向かうからです。ここで聖者の中心に回復された自己の愛は、人が大変容易に、そして自己を大変快く信じるものの全てに背を向けて行きます。私たちの聖者たちは、常に聖者たちがそうであったように貧しく、屋根裏部屋にいて、自らを立派だと思ふことは無く、何も創らず何も約束しない精神の火花に一身を捧げます。しかしながら、その火花を救うための義務に関しても如何なる希望も無く、これらの懷疑家たちは如何なる懷疑も決して持たないのです。それ故に私がこの第四部全体の表題を、キリスト捧持者を意味する名である聖クリストフォロスのイメージの基に位置付けたのです。（完）





## 第八章 告解

無謀な論争を呼び起こすこの表題に基づいて、私はもっと適切に眼に見えない秘密のもう一つの世界を明らかにするために、告白や裁判や刑罰に関するものを集めたいと思います。その時は全てが自由な精神と絶対的な愛で決定されます。茨を生む世俗的な迷信を通して獲得した道を、より一層良く測定されることでしょう。田園的崇拜に従えば、罰には純粋な強制しかなく、誤謬という純粋に外部の自然による如何なる告白もありません。ある木の下で眠るとか、ある果実や動物を食べるようなことが禁止されているのを私は何時も知らないでいます。私は罰によって私の間違いを認識します。もしも言えるとするなら、私はこの様にして学びます。シーザーの体制にあっては、懲罰は公的であり政治的です。それは理解されたいのであり、犯罪と同じなのです。〈国家理由〉と大変良く言われますが、少なくとも〈国権〉とは言いません。それ故に犯人が自ら行ったことや行おうと望んだことにさえ何も認めないなら、懲罰は無駄という考えに従うと人は自白を待ちます。暴君の野望には道理があるということです。従って、道理の無い完全な暴君は決しておりません。政治的な懲罰において成就されることは、ヘーゲルが言っているように、犯人のものであってもまさに意志です。もしもものを盗むなら盗まれるようなものであり、もしも殺すなら殺されるようなものであり、恐怖を与えるなら恐怖を受けるようなものです。政治が精神のものである如く、懲罰も従って精神のものであります。しかし正義と同じ必要性から自白は強制されます。体刑によって直接的に強制されるか、精神的罫によって強制されます。強制の濫用は、前者よりも後者の方法の方が心を動かされることがありません。だが、やはり腹立たしいものです。戦争で行われるように、力が単純に自分の前に打ち叩いて来る方を、時として好まれるかもしれません。その精神は、純然たる警察に残されていて、それは意図には少しも関わりなく単純に邪魔者を追い払います。

他の観念、つまり自由な裁判での自己による自己の観念は、救済されることに貢献しました。この観念は、精神の宗教の中にあるものです。そして、告解の実践が極めて明白に示しているのは、真の価値への配慮がそれ自身によるかの如く、そして諸秩序の避けがたい混淆にも拘わらず、大変に美しい自由や大変に美しい友愛へ赴きます。

人が自己にしか告解しない限り、自己を良く認識することが出来ない、などと私は信じません。自己に対して常に寛大であると言うものではありません。酷い間違いや過度な後悔がある実例も幾つかあるのです。屢々自己へ予言される墮落は、回顧している時でさえも、高慢な絶望に変わります。高慢である理由は、全くの裸形の力である、損なうための力が偉大な力にも似ている、怒りの底で養われるものであるからです。人が語らないもので、まさにより一層活発で悩ましい良心の呵責は、宣戦布告し、危険を求め、不幸をものともしません。深刻な人間嫌いのこの問題点は、常に降下しているということにおいて著しいものがあります。何故なら無慈悲な裁判に従う権力への崇拜は、常に戦闘によって権力を実感させるように動くからです。『人質』(1)の中でクフォンテーヌは言っています、「如何にして神の御心を成せば良いのか。私たちがそれに反対することでしか認識する方法が他に無い時に」。あの暴君的な魂についての何らかの微光をここに人は見出しますが、プラトン只一人がそれを暴き出しました。しかし、私にとっては『国

家論』の有名な数頁はまさに未だ難解です。私はそこから辛うじて注意を喚起しています。私はヴォートラン(2)の大袈裟な話し方にも戻りたいと思いますが、そこでは真実でしかない過度のものを感知します。しかし、それは人が拒否出来ない大袈裟な話し方です。というのも、もしも王には演説しかないとするなら、王の演説は滑稽であり、力が十分あるなら必要でないからです。もしも崇拜の段階を順序に従って人が遍歴して来たとするなら、以上のことが意味するのは、政治的宗教は通過点に過ぎず、それが否定する上部のものによって保持されているのです。そして、もしもそこを越えないなら、狼や蛇の宗教まで再び降下するのです。その様なものが悪魔の論理です。そして、それは何よりも悪魔の内的論理であり、自分自身で永遠に地獄に落ちることを、その神学が言うのに事欠きませんでした。そして極めて見事に描かれたこれらの神話は、安易な解釈を拒絶しています。それ故にキリスト教の奇跡は、叙事詩において滑稽なのです。何故なら多神教の異教が輝いて、少なくともそれにとって代わって乗り越えなかったため、その後の全てのドラマは良心の中で行われ、その見方で言うと外部の領域も単なる手段であり、全て軽視されたものなのです。キリスト教的な多神教と呼ばれなければならないもののこの不十分さは、タツソー(3)の叙事詩『エルサレムの解放』で明らかにされています。そして、シャトーブリアンの『殉教者』の中でもっと適切に書かれています。しかし、福音書はこの種の救済を拒否しています。これだけ言えば十分ですし、これで全てです。

それでもやはり降下を自ら感じる良心が自らを解放し、信仰と希望によって飛躍させてくれる一人の裁定者を必要としているのに変わりありません。従って、安易な嘲笑の数々を無視して、まさしく赦免こそが告解の目的です。それがなければ、人間はその美点を持つことによって破滅させられて仕舞うでしょう。如何なる間違いであっても、その間違いから一種の神を生む精神の錯乱を見分ける術を知らない聴罪司祭は殆どおりません。人を救済する信仰しかないというのは極めて真実です。そして高慢な間違いが、まさしく慈悲とは反対のものであるのも極めて真実です。ジャン・ヴァルジャンと司祭との出会いは、救済の事例としては完全です。伝説として一般化しているこの種の伝説は、巨大な絶望に何時も脅かされている精神の下僕にとっては申し分のないテキストです。勝利は無償でしかあり得ず、そしてこのことは誰もが感じていることです。

もしも人が一人の裁定者を求めるなら、今は恐らく、決して安易に一人の友人には見出さないでしょう。というのも単に悩むだけでなく、毎日昼も夜もそうである大変な躊躇をその友人に伝える恐れがあるからです。見知らぬ秘密の裁定者であるなら、忘れることさえあるでしょうし、時としてはそれが最良のことでもあり得ます。告解において取分け注意することは、自由な告白と懇願された忠告です。裁定者は言われることを待ち、そして判断します。「それを言うのはあなたです」。ソクラテスのこの有名な言葉は、相手の救済と共にありますが、決して自己との対話でしかないこの対話に戻って来ます。何故なら厳格な聴罪司祭が言ったように、もしも上手に説教することに何か思い上がりの罪があるなら、それを知るのはあなたであり、そのことを言うのもあなたであるからです。誰もが濫用を容易に見ることが出来ますが、私は常に大きな危険を負っている精神のこの困難な生活を少しでも明らかにするために、正しい使用のことを単に言っているのです。神学上の決疑論者たちは、人が言う以上に見事なものを創りました。私は『ポール＝ロワイヤル』(4)からの一例をここに挙げようと思います。隠者たちの大修道院は武装さ

れた集団に脅かされています。村の人々がそこに難を逃れてやって来るのです。そして悔悛者たちのある者たちは、恐ろしい粗暴な兵士になり、兜とマスケット銃を再び手に取りました。しかしその時に全員が見張りに立って弾を撃っても良いかどうか、指導者のド・サシ氏に伺いが立てられます。すると、駄目です、音を立てるだけで我慢しなければならない、とド・サシ氏は答えます。最早それ以上は行ってはなりません。しかし、この窮余の策はそれ自体が虚偽でしたし、この有名な指導者もそのことに躊躇しました。彼は喫緊の要務を果たしたのです。相手に勝つという野蛮な喜びや血の陶酔が過度の悪を生み、しかも勇気という表面上の美名で行われることを彼は良く知っていました。その様なものは彼が予見した間違った精神であり、盗人のような者たちの死は別世界のものでしたし、次の様に私は言いたいのです。それは人間たちに対しての不正義です。自己に対してもまさしく最悪で、精神の宗教を認めないものです。そして、それは不純から救済することがなく、反対に凡俗な泥沼へ投げ返すことです。人はそこへ投げることで、自分を投げて仕舞うのです。宗教の間違いは、宗教そのものよりも、宗教の原理を見詰めで批判する者たちにとっては一層危険です。そして、悪魔も又そこにおります。というのも私たちが少なくとも平和の武器を私たちのために求めているのに、悪魔は他の人々に向ける戦争の武器を、遠回しに私たちに運んで来るからです。（完）

（1）ポール/クローデル（一八六八～一九五五）の戯曲（一九〇九完成）。

（2）ヴォートランは、バルザック（一七九九～一八五〇）の『人間喜劇』の登場人物。警察庁長官までになった脱獄囚で、術策を弄し、権力の権化のような人物。

（3）タッソー（一五四四～九五）は、イタリアの詩人で、『エルサレムの解放』は一五七〇～八〇に書かれ、一五八〇～八一に刊行された。

（4）『ポール＝ロワイヤル』は、サント＝ブーヴ（一八〇四～六九）が一八三七年から三八年にかけてスイスのローザンヌ大学で行った講義を元にしてまとめたもので、十七世紀思想界について述べた評論。

最も高級な宗教それ自体から何時も逃れて、私は理性だけでその宗教を明らかにしたい意図は少しもありません。寧ろ私が指摘したいのは、幾つかの他の事例によって、詩が先行して常にそうであったように、私たちの思想を既に今日明らかにすることです。女性は決して男性の奴隷でなく、ここでは更により一層明白ですが、力尽くで物事を決定出来ないことを誰もが感じています。そこから最も大胆な人々は、抽象的で不快感を与える女性の権利を描きました。というのも、もう一度言いますが、政治的制度が如何に完全であると考えても、その背後には力で結ばれていて、見詰めることなく常に押し潰すのです。契約による権利は精神によって美しいものです。同様に戦闘を平等にするための一つの方法でしかないのですが、頼るものの無い弱者たちの儘にして仕舞います。ところで、これらの辛い取決めは、あのキリスト教革命が風習の一つの様式として生み出されるようになった素朴な版画よりも有効ではなく、そして遅れをとったものであることも示しています。というのも、その神学は母親への崇拜を生まなかったからです。寧ろ反対に、言葉の無い瞑想が人間性に従って当初の神話を発展させたのに、その神学は何時も抵抗していたのです。というのも、父にとって代わる息子の不断の成長の中で、私たちは母がその本来の優しさによって殆ど全ての父の愛を、そして恐らく全てのものを創り出すまで支配する権力者に、絶えずとりなしていることを知っているからです。交わし合い送り返されたこれらの伝言によって外部からの必然性は和らぎ、聖家族は画家たちにとって好まれた対象でした。そして通りがかりの人にとっても幸福な瞑想の一つの規範でしたし、直ぐにシーザーや酒神祭女たちのイマージュを持ち出しました。何故なら自然はその時、既に保持出来ないでいる最も美しい希望を、小さな存在の中で絶えず待ち伏せている一人の母をその象徴として、〈神人〉という殆ど耐えられない虚構で支えていたからです。しかし、もっと正確に言うなら、母と神人の二つの弱きものは美しい時間の中であるが儘の如く、永遠の大工の保護の元に、人間の秩序を描いているのです。

その秩序の中で、その大工は材木、斧、垂直、角度、全ての外観そして冷酷な自然の力のことを考えます。そこからは、決して彼のものでない厳格さと権威が彼にやって来ます。そこで彼が告げているのは、仕事の緊急さと順序です。雷と寒さと雨に属するようなこの種の力には誰も異議を唱えませんし、又これからも唱えないでしょう。もしも、生まれると同時に破壊する盲目の世界に安全が依存していなかったなら、現世の如何なる種類の力も決して無いに違いありません。従ってその様なものが男性です。素朴な感情の自由な交換の前で何時も人が望む以上に少しは厳格であっても、安心してぼんやりしているのです。物思いに耽ったようなその視線は、常に外部へ向かい、遠くへ赴きます。反対に母の思想は全てが内に閉じこもります。その思想が形づくった新しいものの上に身を置く時は、更に内に閉じこもり、男性の貝殻である家は女性の領域でもあります。「内部の事物を保存する」というプラトンの言葉は、それ自身で隠喩的意味を持っていて、他の何よりも真実があります。というのも、その内部には人間のイマージュがあり、人間の形をした鋳型として描き出すからです。しかし、その形そのものはその形成の内的方法を意味しており、男性が斧を持つ両手と同じように女性にも敏感に感じられるものです。そして、私

が男性の額そのものから理解するのは破壊する哀れな機能ですが、それは一種の世界への放心によって創造したり保存したりする幸せな機能を、女性の面貌そのものに理解します。これらの二つの力は競争相手にはなり得ません。反対にそれは一つの秩序の中にあり、各々の一方は他方を愛し、完全なるものを望んでいるのです。子供は二つの言葉を聞き、あるが儘としての事物と、あるべきものとしての人間への二つの崇拜の中で成長します。これらの観念は、少しも隠されたものではありません。一人ひとりが、この二つの保護の価値を高く評価します。一人ひとりが、精神的なものと同現世的なものの二つの力を、それらの根源そのものにおいて分離します。しかしながら私は、決して形づくらないものを形づくりたいとする権利そのものの曖昧さによって、人がこの大主題を提示する抽象的で捉え所のない思想を、会話や本の中よりもこの家庭的な絵画を眼で追いながら、二つの秩序をより一層良く描き出します。それは外部的必然性が絶えず人間の形を砕いているからです。外部は侵入し、思想は城壁の上にあります。

それ故に譲らなければなりません。裏切らなければなりません。しかし危険な愛は、恐れられるのと同様に熱愛される一種の素朴さである、あの純粋な動物性の襲来によって、なお一層巧妙に裏切ります。文明というものは、過度の結び付きと切迫した離反という側面において発揮されます。大変に深い井戸の端にあるシャルトルの地下礼拝堂においては、大変に遠い昔から一種の聖母が、丁度この場所で礼拝されていたことを案内人は語ります。この観念は何時も創り出され、何時も壊され、何時も又見出されます。この観念は全ての観念と同じです。それは私たちが持つものでしかありません。結局はその観念を時々私たちに呼び起こすかもしれないのですから、その姿に祝福あれ。『ファウスト』のグレートヒュンに、その様にして沈黙のイマージュが語ります。私たちはこれ以上良く思考しません。これ以上何も思考しません。というのも雌牛や猿やサチュロスによって、畑や森の神々だけによって愛が思考されると私は到底思わないからです。私は、他者の中の愛を言っているではありません。私が言うのは、人が感じる愛であり、愛されている愛です。愛には大いなる冒険がありますが、危険です。美しいのですが、遠くまで連れて行きます。ですからファウストは、自然の最も奥深い処に埋められた〈母たち〉(1)の名を聞いただけで震えます。というのも〈母たち〉をそこに見出すのは、一種の瀆神のようなものであるからです。人が愛することで品位を落とすのは鉄則ですけれども、私は古代の礼拝に結び付く大変自然なこの悪魔的な熱狂にすっかり身を捧げる人間が一人でもいようとは思いません。少しでも自分を救い出す者は、自ら望む以上に高く上昇します。いずれにせよ人は安価に思考しないのは事実です。物理学においてさえも、厳格なものと純粋なものが必要です。ミケランジェロが描いたあの職人のような力強い手によって、光と闇を分離させることが必要です。私は修道院へ送り出したりしません。それは人生から立ち退くことです。ある段階の不正とか権力とか快樂とかを人が拒絶する度毎に、僅かな瞬間でも程々の人生であれば、修道院のことを良く想定するものであると私は理解しています。これらの瞬間が私たちの思想です。幸福な者は自分の思想を楽しみます。私には良く分かりますが、悪魔のような思想とは長く思考されなかったものです。ゲーテのメフィストフェレスは、ひやりとさせるその一例です。そして、純粋でいわば処女的とも言える観念によって、私たちが力学そのものを思考するのも、無意味な隠喩によるものではありません。別世界へのこの視線無くして、私たちは次のことも理解出来ません。それは人間の織物としての何本もの糸です。そしてプラトンは、『ティマイオス』(2)の神がこの世界を完

全な平衡として創り上げ、丸くして、全ての部分を閉じ込めたので、最早少しも手を着けることがないだろう、と戯れながらも大変見事に言っています。人間には人間以外に見出す部分は何も無く、人間の幾多の生活にとっては唯一の瞬間だけで十分であるとは、何と素晴らしい言い方でしょう。（完）

（１）『ファウスト』第二部第一幕の「暗い回廊」の場。

（２）ティマイオスは、前五世紀頃の古代ギリシアのピタゴラス派の哲学者。プラトンに『ティマイオス』の対話篇がある。

## 第十章 クリスマス

---

全ては繰り返し始まります。そして正義は昨日と同じに今日も弱いのです。同じ様に弱くなり、そして同じ様に強くなります。一つの思想の始まりは若々しく、最も貧しい場所で孤独です。そして、それは労働の息子であり、労働によって明らかになり、愛と忍耐によって見守られ、牛と驢馬という沈黙の神によっても見守られ、香を身に付ける富裕者たちの期待にもなっているのですが、自らを取るに足りないと思っていて控え目です。宇宙は星々の装いを倍加しますが、その装いに意味などありません。寒さが噛み付きます。夜明けは思想の中にしかありません。クリスマスよ。クリスマスよ。その子は生まれました。もしも法の博士たちがその子を生かして置くなら、それが全ての問題なのです。

クリスマスには他の響が幾つかあります。いや、あらゆる響を持っています。全ての神話がそこにやって来て手助けします。この集会には全てのもものが正しい場所に着きます。牛と驢馬、東方の三博士(1)、仕える用意が出来た親たちを注視して下さい。この豊かなイマージュを発展させて考えなければなりません、それらの申し分のない輪郭に絶えず従うことです。クリスマスとは何よりも春の祭であり、春の人間の祭です。花々は日向で開きます。しかし人間たちは、昼と夜を教えて来た細心綿密な記憶によって、花々のように花開きます。復活祭は自然の祭です。一日一日は既に、寒さに勇敢に立ち向かう政治的な祭です。クリスマスはもっと注意深く、更にもっと大胆で、十二月二日付近での太陽の躊躇いを置いて冬至と命名されている天文学にもっと近いものです。従って無宗教の異教のクリスマスは、畑や森の精神に先行しています。その精神は、ランプを手を持ってクリスマスで歌います。

眼を覚まさない、眠る良い子よ、  
眼を覚まさない、夜が明けたから。

最も長い自然の夜における精神の夜明けです。木靴や夜の歩行や嬉しい同意が全て一緒になって、精神の曙になります。クリスマスの頃は、人間という鳥の歌です。自然を待つことなく、自然との同盟を更新します。クリスマスの歌はその様にして、もう一つの同盟を告げます。しかし、イマージュに戻りましょう。というのも、それが全てを語っているからです。

クリスマスは人間的秩序を表していますが、それは政治的秩序における真実のものです。家族と三つの力、つまり職業と愛と約束です。家族は、政治的宗教の真の対象である人間的継承を象徴的に表しています。ここでは人間の姿が、他の神々に影響を与えて支配しています。あのオリンポス山において、鷲は最早ジュピターの使者でしかないように、ここではより一層正確な表し方によって、又人間的状況により一層近い行為によって、牛と驢馬が黙って従属されている力になっています。田園の労働が常に第一であるというこの見解によって、シーザー自身はその誕生が呼び戻されて、シーザーの肖像は農民の貨幣の上ですり減って行きます。しかし軍隊によるこの測量をキログラムでもっと正確に量るなら、それは人間への奉仕であり、正確にそのイマージュを描写するためには希望の中にある精神への奉仕そのものです。そこから私たちが引き出

すのは、政治的偶像崇拜は強者たちによる支配よりも、何かより良いものを告げているということです。但し、東方三博士が到着した時、軍隊と富の王たちが大工の子を崇めに来るのです。この様な王位の転覆は、王位にまつわるあらゆる話にあります。繊細な耳はそのことを聞き取ります。しかし、素朴なイマージュはもっと良く語ります。

もう一つの宗教がそれ故、この秣桶である祭壇から立ち上がります。そして更に、物言わぬこの光景を尋ねて、人はその主要な言葉を見出します。その精神は、多く命令された諸観念の幻覚によって自らを崇拜して分別を失います。そして、もしもそれを与えて許さなければならぬ強制出来ない子供の精神を忘れたならば、多くの精神のシーザーは力の暴君になります。ジャン・ヴニユー司祭はジャン・ヴァルジャンに証拠を求めません。そして全ての徳を与えて、彼のために祈り、この人間の夜の中でクリスマスの祝歌を歌います。更にもっと確実なことを言うなら、母のクリスマスの祝歌は子供の夜の中で歌います。そしてそれは精神であること、語ること、まさしく語る前に認識したり見分けたりすることが、認識し見分けることになるのと何時も歌います。というのも、お伽話が語るように、予め精神の花々を乾燥させて萎びさせるには、揺り籠の傍らに老いた魔法使いがいれば十分であるからです。「お前は愚か者になるだろう。お前は嫉み深い人になるだろう。お前は盗人になるだろう」。これらの予言は、子供の精神が自分自身の非を余儀なくさせる確信によって検証されます。そして常に虚構ではないこの虚構によって、慈愛は完全を期待しないのに、愛以上のものである全ての姿を現します。人間は、単に愛に値することで、屢々慈愛を消して仕舞います。そして最良の人々も、彼らが見出したお互いに愛する理由によって、お互いに愛することを忘れて仕舞います。ところが子供の前では疑いは少しもありません。精神に何も期待しないで、精神を愛さなければなりません。精神そのものには確かに精神の慈愛があります。それは思考することです。しかし、イマージュも見詰めて下さい。母も見詰めて下さい。

もっと子供を見詰めて下さい。この弱き者は神です。全てを必要とするこの弱き者は神です。私たちの世話がなければ、生存するのを止めるであろうこの存在は神です。その様なものが精神です。それに照らせば真理も偶像です。真理は力によって名誉を傷付けられていたのです。シーザーは真理を軍隊名簿に載せて、それに良く報いました。でも、子供は真理に報いません。子供は求めて、更に求めます。精神は報いず、そして如何なる精神も二人の主人に仕えないというのは、精神の厳しい規則です。それにしても経験が決して否認出来ない真理の中の真理がある、とは何故言うことに尽きないのでしょうか。この母は、証拠を持つことが少なければ少ない程、愛したり助けたり仕えたりすることに専念します。母が腕に抱くこの人間としての真実は、世界に存在するものとしては恐らく何ものでもないでしょう。しかしながら母は正しく、子供の全てが母に損害を与える時も、母はなお正しいでしょう。知恵遅れの子供を世話して、予言者たちのように注意力の何でもない閃きを待ち続ける医者たちにも、友愛の一言が支えます。医者たちは決して倦みません。彼らは正しいのです。運命に勇敢に立ち向かう者は、従って真実の中の真実があります。そして、私がデカルトに付いて行きながら指摘出来そうなことは、検証されない真理、無用の真理、如何なる力も無い真理の娘でないとしても、同じ検証も同じ有用性の真理も決して無いということです。しかし産業の真理は、忘恩の娘です。その上、報酬によっても百回も罰せられます。これらの観念が恐らく姿を現して、そして精神はあらゆる種類の力という力を



自らに禁じる術を知るでしょう。この様なものが最も高度な支配です。ところでキリストの十字架は大変雄弁に、そしてそんな風に変激しくそれと同じことを告げていますが、私は如何なる注釈もつけ加えないことにします。

(最終部・完)

(1) 東方の三博士は、イエスの誕生の祝いを述べにやって来たという。

この翻訳は、アラン『神々』Alain, *Les Dieux* の全訳である。電子書籍へは全二巻（上・下巻）にして登録した。テキストとしては、Alain, *Les arts et les dieux* (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1958 に所収されているものを使用している。

アラン（一八六八～一九五一）は『神々』を一九三四年にガリマール社から刊行したが、前年の一九三三年にパリのリセ（高等学校）であるアンリ四世校を六十五歳で定年退職している。一八九二年にブルターニュ地方のポンチヴィという田舎町で哲学の教師になって以後、四十一年間をリセの教師として生きて来たことになる。但し、一九一四年八月に、四十六歳の高齢にも拘わらず第一次世界大戦へ志願兵として参戦している。フランスが実際に戦争になれば、反ドレフュス派や国家主義者たちに任せて置けないというアラン自身の心意気があったものと思われる。その後、踝に負傷したりして一九一七年十月に復員するまで三年余りの兵役時代にも、有り合わせの紙で多くの原稿を執筆したことは有名である。書いた原稿を自宅にいるマリー・モール＝ランブラン夫人へ毎日のように郵送したのである。夫人はそれらの原稿を赤いノートや青いノートに纏めていた。『マルス、又は戦争批判』（一九二一）、『精神と情熱に関する八十一章』（一九一七）、『芸術論集』（一九二〇）などの最初の草稿であった。帰還したアランはアンリ四世校へ復職しながらも、それらの草稿を元にした作品を始め多くの作品を刊行しているが、その執筆活動には目を見張るものがある。

勿論、教職の仕事にも精励恪勤し、アンドレ・モーロアやシモーヌ・ヴェイユのような優れた人物たちを輩出している。当時のリセの授業はおおらかな処があり、ソルボンヌの大学生たちもアランの授業を受けたくて潜りで這入り込み、教室が一杯になる程であった。大学側からは取り締まって欲しいと言って来たとのことであるが、アランは一向に気にしていない様子であったらしい。翌年からはリセの管理者が強化したとのことである。因みに、アンリ四世校での最後の授業には、当時の文部大臣も駆けつけてアランの授業を教室で見学したとのことである。

アランの名がフランス国内で有名になり、ソルボンヌ大学から哲学の教授として招聘される話や、文学賞などの様々な賞の受賞要請の話が来ても、アランは全て固辞し続けていたという。ソルボンヌ大学の哲学を真の哲学と見做さず、哲学史として陳列するためのものであり決して真実を探究するものではないと見做したアランは、ソルボンヌのアカデミズムと無縁でいたかったからである。又、賞を受けるためには授賞式に出席しなければならず、その時間が惜しかったからであると言われている。何故ならアランは大戦前から、毎日執筆することを自らに課していたからである。定年後は長い間リューマチの痛みにも耐えていたアランであったが、地位や名誉は書くためには何の足しにもならず、偏に創造すること、執筆することのために、自らの生活の全てを充てる努力に邁進していたのである。まさにアランの〈足るを知る〉生活姿勢は、作品を執筆することに収斂され、自らの思想の充実を企図したものであったと言える。

以上のように定年後のアランは、煩雑な教職の仕事からも解放され、愈々執筆活動に専念する様相を深めて行った。従前からアランは宗教に関して、宗教そのものを決して否定していた訳ではなかったが、宗教の意義を歪曲して神や教会や社会や国家という美名によって巧みに利用する

愚行を指摘していた。定年後間もない一九三三年八月一日から九月二六日までの間に、ブルターニュ半島南方の大西洋に面した町であるプールデュの家で書いたのが、この『神々』である。一九三四年五月二二日にガリマール社から刊行された。四月二〇日に五、八八五部が印刷されたとの記録もあるが、いずれにせよ『神々』はアランが定年後に執筆活動に専念する生活に入ってから真っ先に着手されたものの一冊であったと言って良い。その頃のアランが『神々』について書いた言葉があるので、最後に記して置きたい。

「宗教の謎を解く鍵というものは、隠喩の背後に見出される恐ろしい程の空虚です。そしてこの空虚への恐れが、私たちの人生そのものである幼年時代の自然な見方によって第一に説明するのであり、自然を活気づけることへ私たちを押し進めているのです。生理的とも思えるこの眼に見えないものが神々の中の神であり、それは何ものでもないのです。」（一九三四年五月二二日のマリー・モール＝ランブラン夫人への献辞）

なお、本書を翻訳するに当たり、伊沢義雄氏の優れた訳書（一九七〇）を参考にしたが、多くの教示を授かったことに感謝申し上げます。

この翻訳を通して、宗教について透徹した思想を語るアランの言葉を玩味して戴き、先ずは精神の宗教を理解し、そして何ものにも騙されない自己と、平和であるための社会を正しく勇気を持って認識する機縁にして戴ければ、訳者としては望外の喜びである。

二〇一五年八月十三日

東京西郊・たまプラーザの寓居にて 訳者記す

## 神々（下）

<http://p.booklog.jp/book/99683>

著者：アラン（翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99683>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99683>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ